# ＩＳ何故か好かれた月村さん

ネコ削ぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　何故か好かれた月村さん

【Ｎコード】
Ｎ７５２８Ｕ

【作者名】
ネコ削ぎ

【あらすじ】
学生時代の苦境を乗り越え、私は今、自由だ。なーんて、上手くいくハズがないのさ。まあ、大事件は若者に任せて、私は保健室で待機するよ。いつでもおいで。

## 1拝啓　父（前書き）

歩いてたら思いついたので書きます。たまに書きます。書けたらの話ですが。あと、少しでも時間を割いてくれる人が居れば。

# 1拝啓　父

拝啓　月村　りゅうめい様

地球温暖化ですっかり暖かくなってきた今日この頃、いかがお過ごしでしょうか。
私は元気でやってます。どのくらい元気かと言えば実家に居たときの三倍は元気です。
話は変わりますが、私は父の事が心配です。父（手紙を読んでいる貴方）はサバイバル能力は高いのに生活能力が低いから、ちゃんと朝昼晩と三食作って食べている想像が出来ません。私が学生の頃、たまに家に帰ってくると台所がとんでもないことになっていましたから。死んだ母が立派な方だと痛感しました。

また話は変わりますが、最近私も少しは仕事に慣れて来ました。父の嫌いなＩＳ学園はとても良いところです。
ちなみに私は父がＩＳを嫌うのが嫌いです。ＩＳを嫌うのは構いませんがそれを理由に再就職を拒否するのは止めてください。見てると悲しくなります、不甲斐なくて。
ミリタリーマニアで本物の銃弾を敵地に乱れ撃ちしたいと言う不純過ぎる動機ではありますが、自衛隊で働いていた頃の父はとてもカッコよかったです。
ＩＳが出てきたから「今まで銃が撃てなかったのに更に撃てなくなる」と言って上司に辞表を叩きつけた父をカッコいいなんて口がさけても言いたくありません。
けっこう話を戻しますがちゃんと生活してください。ひがな1日知り合い達と戦争ごっこなんて止めてください。思わずネットで見つけてしまいました。
そういえば1年前に貸した7万円を早く返してください。娘に金を

借りて恥ずかしくはないのですか？
…借りた金額が違うと言いそうなので書いておきます。『利子』です。大事な事なので括弧しました。
では、御体にお気をつけてください。

娘　月村　遊姫より

ＰＳ
父の『りゅうめい』の漢字を忘れました。

学校唯一の医療場、サボりの魔都、生徒の味方。
様々な言い方がたぶんあるこの部屋。名前を『保健室』と言う此処こそがＩＳ学園における私の仕事場。
日々誰かしらが駆けつけてくる、戦場。
私、月村（ガツムラ）　遊姫（ユウキ）は保健室が好きだ。……別に学生時代にサボりまくっていたわけではありませんが。
何で好きかと言えば、保健室はさ、何かゆったりした時間の流れを感じられるから。学生時代は殺伐とした日々を送っていたからね。
コーヒーをズズズっとすすりながらのんきに椅子に座る。キャスター付きでスイスイーっと机の方へ滑る。ちょうどいい位置で足で止めるのを忘れない。
前を止めてない白衣がパタパタと軽くなびく。

白衣の下には黒いタンクトップを着ている。

タンクトップなんて安いものだ、特に私のはな。

保健の先生らしくないんだけど、このＩＳ学園は血気盛んな女子学生がわんさかいるから動き辛い格好なんて自殺行為なのさ。知り合いからは止めろと言われてるけど。この前、知り合いが「止めろ、押し倒したくなる」なんて言っていたなー、その知り合い女性だけど。

……スタンガン何処仕舞ったかな？

先輩強いから致死量でいかないと此方がやられてしまう。

唯一の救いはその先輩が現在専用機を持っていない事だ。

ありがとう、神様。

キャスター付きの椅子を足でグルグルとゆっくり回転させる。

ああ～、目が回る。

そういえば、初の男性でＩＳを使える人が見つかったんだって。しかも２人。

ハッハッハー、大変だな御２人さん。なんとモルモット確定だー。

最初ニュースで見た時にビビりました。何せ男性でＩＳを使えるのが２人も現れたから。私の記憶では１人だと思っていました。

はてはてさてさて、誰なんでしょうか、イレギュラーさん。

## もう1人の男の子…居たっけ？

拝啓　月村　遊姫様

昨今の地球温暖化の影響でサバイバルゲームがやりにくくなってきた今日この頃、いかがお過ごしでしょうか。
お父さんはとても元気に生きてます。元気すぎて家の中がとっ散らかっていますが。早く遊姫に帰って来て欲しいです。お父さんが片付けると何か更に事態が悪化します。やはり遊姫の片付けが一番だと思います。ですが、この前帰って来た時の片付けみたいにお父さんのエアガンを捨てるのは止めてください。
そういえば、貰った手紙に書いてあった7万円の件ですが。お父さん考えたんだ。娘にお金を借りるのカッコ悪いけど、それを返すのはもっとカッコ悪いじゃないかと。何か、父親の威厳的なモノがあるんじゃないかと。遊姫も親孝行だと思って、貸したお金の事は水に流してお父さんにお金貸してください。
娘がいつまでも健康でお父さん子である事を願っています。

父　月村　流五月より

PS

お父さんが死ぬまで結婚しないでください。

ＩＳ学園の保健室。私の砦だ。そう私の持つ砦だ。朝から晩までこ

の部屋でのんびり出来る私は最高だな。うん、最高だよ。目の前に織斑　千冬先輩が居なければなお最高だよ。……私は何かしたのか？先輩を怒らせることを。

「遊姫、来い」

「えーっと、行きたくないかなー」

だって何だか嫌な予感がするんだもん。私の平和が乱される予感が。

「拒否権は無いぞ」

ハハハ……だよね。

私は諦めてキャスター付きの椅子から立ち上がる。サヨナラ、相棒。

「時間が無い。行くぞ、遊姫」

い、嫌だ、行きたくない。……すいません千冬先輩。自分の足で歩きます。逃げませんから襟引っ張って引き摺らないでください。

千冬先輩に引き摺られること数分、私は1年1組の扉の前に連れてこられた。

「千冬先輩、私、受け持ちのクラスは無いはずですけど」

襟を放されたので自分の足で立ち上がり、服の乱れを直す。乱れと言っても、タンクトップにジーパン、その上に白衣を羽織っているだけだからあんまし意味無し。

……おーい、千冬先輩。何で少し顔が赤いんですか？……あ、タンクトップの裾が捲れてる。直さなきゃ。

先輩、何で荒い息で手をワキワキさせているんですか。

諦めたので早く行きましょう。

私の渾身の説得で千冬先輩は落ち着きを取り戻してくれたので共に教室に入る。

中に入れば、大量の女子生徒達。その中に2人の異分子が居た。1人は緊張の面持ちで佇む、ラッキーハーレムこと織斑一夏。……何してんの？目立ちたがり屋かな。大変な性分だね、応援してるよー。

「遊姫さん！？」

「月村先生と呼べ」

いきなり私の名前を呼んだ一夏君は姉である千冬先輩の出席簿でおもいっきり、もう一度言うよ、おもいっきり叩かれた。うおぉ、痛そ。

「一夏君、だいじょぶかい？」

見てて悲しくなったので声をかける。たぶん一夏君の耳に届いてはいないだろう。だって女子生徒がキャーキャーキャーキャーと奇声を発する。原因はうん、千冬先輩。

色んな事を言ってるね女子諸君。

どうでも良いけどさ一夏君、何か嬉しそうだね。大好きなお姉ちゃんが褒められて嬉しいか、このブラコンが！！とっても羨ましいです。良いな、私も兄弟欲しいな。

何て言ってる間に千冬先輩が私の肩に手を置く。

はい？

……あ、あぁ自己紹介ですかね。

「どうも、はじめましておはようございます。私は保健を担当しています、月村　遊姫って言います。怪我したらバンバン頼ってください」

うん、頑張ったよ私。私は生徒みんなの味方だよ。千冬先輩がビシバシとやっちゃうし、真耶ちゃんは頼りないし、私だけがみんなに優しくしてあげよう……なーんて。

用事が終わったと勝手に解釈した私はすぐさま保健室へと戻る。なーんか忘れているなー。……おぉ、もう1人の男の子を忘れてた。

## 保健の先生だよ、仕事してます

月村　遊姫は改造人間である、名前はまだ無い。…なーんて言ってみる。もちろん、キャスター付きの椅子に座りながら。
今頃は新入生達が授業を受けているだろうね。真耶ちゃんの授業かな？それにしても一夏君と知らない男子は大変だね。何故なら女の子が一杯だからねー。キョロキョロキョロキョロ目移りしちゃうよ。ざ・はーれむです。
でもでもでもね、男の夢のはーれむって奴は現実で考えると、火薬庫で水遊びしてるようなもの。……どーゆーこと？
くっだらないことを考えていたら保健室の扉が開かれた。

「月村センセー」

侵入者は3人。ヤル気の欠片も無い3年生達。サボりにきたにゃー。

「センセー、みうっちが怪我しちゃった」

1人の学生が（仮にみうっちと呼ぼうか、水島　うみちゃん）2人の学生に両側から支えられながら来るではないか。足に怪我したのかハンカチでキツく縛っている。
みうっちゴメン、純粋に保健室に来てくれたのに邪な解釈して。

「見せてごらん、治療しちゃうから」

キャスターをフル回転させて移動する。
隅っこから椅子（キャスター付き）を持ってきてみうっちを座らす。
次はデスクまで椅子を走らせ、引き出しから二種類の紙を一枚と二

枚とで合計三枚取り出す。
デスクを軽く蹴ってみうっちのところまで戻ってみせる！！
２人の学生が見守る中、パパパパパっと治療しちゃうよー……もちろん丁寧に。

治療後はさっき出した二種類の紙に色んな事を記入する。一枚は怪我の内容を記入、あとの二枚は許可証的なもの。私がこれ等の紙を書かないとみうっち達は大変なめになっちゃうんだよ。簡単に言うと無断欠席、サボりになります。だがしかーし、私がこの魔法の紙に内容記入と署名をす・れ・ば、なんと公認でサボることが出来ちゃう。
まぁ、授業に置いていかれちゃうけどね。

３人を帰したあとの私は自由を満喫していた。
ぐるぐるぐるぐるぐるぐるーーーっと……ピタッ！！
私の足によって椅子の回転が止まる。

「何の用かなー、真耶ちゃん」

私の目の前には山田　真耶ちゃんが涙目でさっきのとは別のキャスター付きの椅子に座っていた。

「新入生の皆さんと仲良くやっていけるか心配なんです」

それは、また、切実な問題だね。
大変だね、心配だね。でもね真耶ちゃん、なーして私の手をサワサワしてんのかな？上目遣いしてんのかな？時折、ベッドをちらっちらちらっちら見てるのかな。私は身の危険しか感じられないよ、真耶ちゃん。

「私、駄目かもしれません。遊姫さん、頑張れるように頭を撫でてください」

そーゆーのは後に出来る彼氏君に言ってください。

## 1日の終わりは蹴り！？

なでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなで。

「はふぅー」

満足かな、真耶ちゃん。そろそろそろそろよろしいかな？私も暇じゃあないのさ。真耶ちゃんも仕事があるじゃない。千冬先輩におっこられちゃうぞー。

「ありがとうございます、遊姫さん。私、しばらく頑張れます」

さようでございますか。……ん？しばらく？

……最低でも1週間は間を空けてね。

嬉しそうに保健室を後にする真耶ちゃん。途中で転んじゃ駄目だよ。

真耶ちゃんがさっきまで座っていたキャスター付きの椅子を部屋の隅っこに片付けて、私は愛馬に腰をおろす。デスクまでスイスイーっと移動する。

デスクの横に備え付けられた引き出しからポータブルテレビとクッキーを取り出す。

さて、のんびりしちゃいますか。

コンコンコンコン。

目の前にある扉をノックノックノックぅーっ。……そんなにノックしてないけどね。
おぉ、ラフな格好で出てきた生徒さん。

「はい、これ私の電話番号。怪我や病気、精神的な何かがあったら気軽にかけてね」

ニコッと笑って紙切れを渡しちゃう。もちろん、電話番号書いてあるよ。
さてさて、次の部屋は誰かな？

んんん？ムムムムムー？何かしんどい音がするよー、空耳かなー。
……いや、違う。隣の部屋から一夏くんが飛び出して来る。追いかけるポニーテール。手には木刀。
はい？……うん、意味が分からないーっと。

「なーにしてんのかな？」

私は保健室の先生（保健の先生にあらず）として目の前で行われる暴力を許す訳にはいかないにゃー。

「先生には関係ありません」

勇気を振り絞ったのに一蹴ですか。酷いよサムライガール。

「どしたの、一夏くん」

最後の希望だ一夏くん。私の想いに応えてくれ。

「え、あぁ、遊姫さん、いつの間に」

いつの間に……？さっきから居たよ！！一夏くんの馬鹿、もう知らない。

彼等2人に背を向けて、ダッシュで退散んんー！？何か抵抗感じる。ま、前に進めない。

何かなーって振り向くと白衣の裾が一夏くんに捕まれてる。こーんな状況を見たサムライガールが木刀を振り上げてくる。

待って！！私は先生だよ、ヤバいんだよ、手を出すと！！

「何をしている、一夏！！」

「何もしてないぞ、箒。木刀をおろせ！！」

止めて2人とも、私を巻き込まないで。とっても泣いちゃいそう。

私がパニックになってると箒ちゃんなるものが何故か私に木刀を振りおろす。

させるか！！なーんてヒョイっと避ける。木刀が一夏くんに命中したけど気にしない、気にしたくない。自業自得さ、ラッキーボーイ。

一夏くんを捉えたままに止まる木刀を箒ちゃんから取り上げる。べっつにイジメじゃないもん。教師の務めだもん。

木刀を地面に突き刺す形で持ち、蹴りで真っ二つに変えちゃう。い、イジメじゃないもん。きょ、教師の務めだもん！！

## 安全なプライベート用の携帯が欲しい

ピーっと言う発信音の後にメッセージをお入れください。

お父さん、遊姫です。保健の先生として頑張っているので安心してください。さて、あまり時間が無いので手短に用件を言います。そろそろ7万円を返してください。私はあの日からずーっと返済を心待ちにしています。言いたい事が分からないだろうと予測出来るので言います。

働け、いい加減に。

いやー、昨日は大変だったよ。どのくらい大変だったかって言うと……どのくらいって、難しい言葉だね。兎に角大変でした。私が木刀を蹴りで破壊したから箒ちゃんフリーズしちゃうし、騒ぎを聞きつけた女子達が集まりだしたし、一夏くんは私の胸ばかりを見るし……エッチ。

最後はもちろん、千冬先輩がやって来てゾワっとしました。まあ、千冬先輩のおかげで蜘蛛の子を散らすように女子が部屋に逃げたから良かったよ。

千冬先輩は箒ちゃんが持っている木刀全部ぼっしゅー。私が折っちゃった物に関しては不問……イエーイ。一夏くんに何かを耳打ちした後、千冬先輩が私を引きずって退散。

嫌な予感がしたので、白衣をキャストオフして逃亡して1日終了。

私は今、生の喜びを噛み締めている、味はしないけど。

保健室はへっいわだなー。たっのしいなー。新しい携帯がほっしいなー。
私の相棒、キャスター付きの椅子に座ってグルグルグルグル回転する。
仕事用のけーたいはあるんだけどね。……いやぁ、プライベート用のけーたいも持ってたんだけどさ、何かイタズラ電話がかかってきたんだ。確か……束先輩の声だったけど、きーのせいってことで夜景の綺麗な浜辺から全力投球で海に投げ捨てました。
不法投棄だからドキドキしちゃった。
「私のアドレスを消すとは何事だ」なーんて千冬先輩に怒られてしまいました。いーじゃん消えても。どうせ互いに連絡しないんだから。千冬先輩のこと着信拒否してるしね、テヘ。

## ガンバだ男の子

ピーっと言う発信音の後にメッセージをお入れください。

お父さんだよ、遊姫。元気かい、お父さんは寂しいよ。遊姫が帰って来ないから。たまには帰って来て家の掃除をしてほしいな。

……絶対働かないぞ、お父さんは。何が悲しくてデスクワークなど。お父さんはな、お父さんはな、実物の銃が気軽に扱えて、サバゲー以上の興奮が得られる所じゃなきゃ嫌だ。絶対7万は返せないぞ、諦めてくれ。あと、お父さんが死ぬまで結婚は許さない。

放課後だー、だから何だって言うんだよ、アンタは。

クルクルクルクル回っております、保健室で。もちろん、相棒のキャスター付きの椅子に座って。

ほんわかふにゃふにゃのまったりとした時間を過ごせる私は幸せだー。紅茶とちょっとしたお茶菓子が私の心を満たしてくれます……安いなー、私。まあ、気にしない。

グルグル回転しながら紅茶を楽しんでいると、コンコンっていうノックの後にボロ雑巾がひらりと侵入してきた。

「どしたの、一夏くん？」

ボロ雑巾の正体はなんと一夏くんでしたー、パチパチパチパチ。……ボロボロだね、何？追い剥ぎ？元気だねー、男の子。

「箒に容赦なく叩きのめされたんだ……です」

「べっつに保健室でなら前みたいにしていいよ」

「それじゃあ、遠慮なく」

とりあえず、一夏くんを治療してあげちゃう、腫れた所をペシリと叩きたいけど。

「遊姫さん、頼みたいことがあるんだ」

唐突だね、君は。

「何じゃね、一夏さんや」

「いや、意味が分からないけど。じゃなくて、ＩＳについて教えて欲しいんだけど」

ＩＳ…その単語が私の心に変な違和感を与える。少し息苦しい。

「む・り。私ＩＳは専門外だよ、残念だけど。保健のことならいけるんだけどね」

「え！？」

ん？何で顔が赤いのさ一夏くん。変な想像したんだね、青少年。

「いきなりだね、ＩＳについて知りたいなんて」

どうしてかな、どうしてかな？授業についていけないか少年。

「試合があるんだよ、代表候補生って奴と」

ふーん、大変だねそれは。まだ2日目だよ、なにしてんの？相手が代表候補だなんて。たぶん、セシリア・オルコットかな？なーんか、色々忘れてるな。……もう1人……一夏くんのクラスに……男の子が居たな。存在薄いぜ。

## 救世主＝尊い犠牲

一夏くんを治療した後、私は一夏にもお茶菓子を差し出した。ちっちっちっ、毒なんかは入れてないぜお客さん。紅茶を口に運びながら一夏くんの体験を聞く。何があったか、どう思ったのかと。心のケア、カウンセリング。カウンセラーの先生はべっつに居るんだけどねー。仕事取っちゃった、いやーん、夜道で刺されちゃうにゃー。なーんて考えていたら、保健室の扉が開き、箒ちゃんが入って来て一夏くんを拐っていった。

「おっだいじにー」

絡まれたくないけど一応ね、社会人だし。
患者が帰った後はいつも通り。紙を取りだし、一夏くんの名前と怪我の内容と処置について記入していく。仕事はしてるんだ、偉いッス私。
ランラン気分でグルグル回転。もちろん、愛馬であるキャスター付きの椅子に乗って。

「遊姫！！」

ばんっと言う音が響き渡り、身体が浮遊してベッドの上に投げ出される。

邪気！？

「いやぁぁ！！」

身体をぐりんと捻ってベッドから降りる。そして、思い切りベット

を下から蹴りあげる。

「あ!?」

やっちった。

なでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなで。

「痛いの痛いのーっ飛んでけー」

今、私は人生で2、3番目の過ちを犯してしまった。確かに私が悪い、悪いよ。でも、いきなり抱きついてベッドに押し倒しますか普通。どう思いますか、千冬先輩。おかげでベッドの上にいた千冬先輩ごとベッドをひっくり返してしまいました。べ、別に千冬先輩のためなんかじゃないんだからね、勘違いしないでよね。……すいません、一歩間違えれば殺人でした。あ、危ない。千冬先輩が死んだら、私が政府に殺される。だから、私は千冬先輩に膝枕してあげちゃいます。頭、なでなでなでなでしちゃいます。だから睨まないでください千冬先輩。

「まことに申し訳ありません、千冬先輩。私はどうやって罪滅ぼしをすればよいのか」

泣いちゃいそう……あれ、おかしいな……泣かないって決めたのに。

「遊姫」

「……はい」

「私と一緒に……寝ろ」

「……や……はい」

ギロリと睨まないでください。蛇に睨まれた蛙状態の私は千冬先輩におもちかえりされるしかないみたい。さよなら、私。

「何の用だったんですか？」

「一夏が代表候補生と戦うから心配だったんだ」

けしかけたの千冬先輩ですよね？

その後、私は助かったんだ。だけどその後に本当の後悔が待っていたんだ。分かりやすく言えば、真耶ちゃんが千冬先輩に引っ張られる私を見て突撃、見事にマウントポジションを取られ、たこなぐり……真耶ちゃんが。うん、とりあえず真耶ちゃんを保健室まで連れて行く。バイバイ、千冬先輩。

血の涙を流す千冬先輩に背を向けて、ダッシュでその場を後にする。

ありがとう、尊い犠牲者。

## 誰だアンタはーって言ってみる

アンケートにお答えください。

Q1　アナタにとって非常に気になる人はいますか？（YESorNoで）

A　父親

Q2　その人とアナタの関係は？

A　手のかかる父親

Q3　気になる理由は？

A　借金を返してくれないから

Q4　その人にしてあげたいことは？

A　とりあえず借金を2倍にする

Q5　その人がアナタの言うことを1つだけきいてくれるなら？

A　仕事してもらいます。

ありがとうございました。

気づいたら、真耶ちゃんと一緒に寝ていました。後ろから抱きつかれていたので動けなーい。昨日散々ボコられたのに何で痣とか無くなってんの！？ギャグ補正かチクショウ。羨ましいぞ、真耶ちゃん。何とか真耶ちゃんの拘束から逃れたのが既に5日ほど前。今はなんと、一夏くんのデビュー戦だー……それで？応援席からの

んきに応援するよー、何て思っていたら、千冬先輩と一緒に一夏くんのＩＳが来るのを待ってる。
……あれ？私いる？何か気まずいよ。千冬先輩、何か話題を、発展させやすい話題を１つだけ。

「千冬ねぇ……」

バシン！！

「織斑先生と呼べ」

……ドンマイ、一夏くん。
一夏くんが場の雰囲気を和らげようとしたが（もちろん、私の主観さ）失敗。ならば私がいくっきゃないでしょう。

「千冬先輩ー」

あ……ヤバい、いつもの調子で喋っちゃった。
……ゾワっとした。
えーん、相棒のキャスター付きの椅子に座ってまったりしたいよ。

「何だ、遊姫？」

……セーフ？やったぜ、助かったんだ私は。なんか嬉しくて泣きそう。千冬先輩の方を向いて質問するよー。

「あの子……誰ですか」

私と千冬先輩が向かい合っていて、一夏くんは私から見て千冬先輩の右隣。つまり、千冬先輩の射程範囲、どーでも良いけど。で、ま

たまた私から見て一夏くんの右側に佇むイケメンくん。どっかで見たことあるんだけど、思い出せないから千冬先輩に質問しました。

「知らないのか？」

私の質問に件のイケメンくんが反応しちゃいましたね。でも、い・い・の・か・な？そーんな言い方して。

バシン！！

「おごぉ！？」

だから心の中で言ったじゃん。どうでも良いけどさぁ、千冬先輩はどーやってイケメンくんの前までテレポートしたの？スッゴいね。私が言うのもなんだけど、人間辞めました？

「千冬先輩、保健の先生の前で暴力はご法度ですー」

見逃したら、親御さんに叩かれちゃうからね、私が。

「ところで君は何ぞや」

よくないことだけど、腰に左手を当て、右の人差し指でオマエの心を差す。なーんて言ってみたい。ただ、リスクが高い。痛い子に認定されるから。

「知らないのか……知らなかったんですか、月村先生？」

舐めた口調で話しかけようとしたイケメンくんは千冬先輩の出席簿がチラリと視界に映ったのか、口調を直した。馬鹿め、千冬先輩の

前で俺様一番が語れると思うなってことです。

「君は一体誰なのかな？イケメンくん」

「な！？」

「え！？」

うん？どしたの、織斑ぶらざーず。

「イケメンくんって……まぁ、オレはきさ――」

「織斑くん織斑くん織斑くん織斑くん遊姫さーん」

高機動型真耶ちゃんがものすごいスピードで私に迫って来た。

「させない！！」

私の華麗なる回避運動を見よー……って回避先で千冬先輩が手をワキワキさせてるー！？なら後ろは……ラッキーマン一夏くんが待機してる。

終わった、終わったよ私。

私は諦めて迫り来る真耶ちゃんに抱きしめられた。１番安全なんだもん。

## さよなら、ぶるーてぃあーず（前書き）

何となくこのタイトル。

## さよなら、ぶるーてぃあーず

アンケートにお答えください。

Q1　アナタにとって非常に気になる人はいますか？（ＹＥＳ　ｏｒ　ＮＯ）

Ａ　娘

Q2　その人とアナタの関係は？

Ａ　愛娘

Q3　気になる理由は？

Ａ　高校生の頃から発育が良くなって、艶かしくなった身体。可愛らしい顔。それがお父さんなんて言ってくれるんだぞ。もうお父さんが死ぬまで結婚しないで欲しい。お父さん、娘の将来が心配。

Q4　その人にしてあげたいことは？

Ａ　とりあえずサバゲーの素晴らしさを教えたい。

Q5その人がアナタの言うことを１つだけきいてくれるなら？

Ａ　お父さんに仕送りして。

一夏くんのＩＳが届いた。そのことを全速力で伝えに来た真耶ちゃんは今、私に抱きついている。保健の先生に介抱してもらっている、

なーんて言い訳して。織斑ぶらざーずが羨ましそうに見てくるよ。
……一夏くん、ＩＳが届いたんだから動きなよ。千冬先輩も指示を出してください。……そこのイケメン、なーに鼻の下伸ばしてんだよ。このハーレムマンめ。

色々な弊害があったんだけど、やっとこさ出番だ一夏くん。ＩＳ纏っちゃったね。……もう、後には退けない。まぁ、頑張って。

「行ってくるぜ、千冬ねぇ、遊姫さん」

「あぁ、行ってこい」

……千冬先輩、私の腰に腕をまわすな、抱き寄せるなー。真耶ちゃんも踏ん張るな、はーなーれーろー。
腕をブンブン振り回して抵抗するけど、千冬先輩にはかなわないのが現実。

「観客席に行きましょ、早く、速く」

そして私を離せ！！

「そうだな」

「そうですね」

にゃー、２人が結託したー。両腕を２人に引っ張られながら歩くなんて、公開処刑ものだよ。
ズルズルと運ばれていく私の頭の中ではドナドナが絶えず流れていたりいなかったり。ねぇ、千冬先輩。あのイケメンくんを放ったままですよー。

このまま拉致されるなんて、私のなけなしの自尊心が許さないかも。

「あ、ＵＦＯ」

「珍しいな」

「神秘ですね」

にゃーっ、軽くいなされた！？

てか、離せー、考えてみたら保健の先生として一夏くんとオル……タナティブちゃんの近くに待機した方がいんじゃない。

そんなこんなで然るべき場所まで２人に拉致されちゃいました、てへ♪

箒ちゃんがいるじゃないですか。へい、かーのじょ、このお姉さん方引き取って。

２人に挟まれながら座る私は諦めの表情で宇宙（そら）を見つめる。おぉ、１段上を見てしまいました。

現実を見ようかな、そろそろ。

空を見上げれば、一夏くんとオル……ゴールちゃんが戦っている。

……訂正、一方的な現代的戦闘術、通称イジメが行われてる。強いね、オル……コッ……ちゃん。なんかファンネルみたいなの飛ばしてる。遅いな、ファンネルより。あれが噂のぶるーてぃあーずか、私もやりたいな。「そこだ、ファンネル！！」なーんて言いたいなぁ。アレは結構な鬼畜兵器でした。でも目の前のぶるーてぃあーずの遠隔操作型射撃兵器は幼稚過ぎる。私なら蜂の巣です。

そんなこんなで、一夏くんがミサイルに激突した。

「ＩＳの性能に助けられたか」

隣の千冬先輩がカッコいいこと言ってる。
私も負けじと言っちゃいたい。「オマエの実力ではない、ＩＳの性能のおかげだと言うことを忘れるな」と。でも私は優しいのでそーんなことは言いません。

勝者、セシリア・オルコット。

……いくらＩＳの性能が良くてもねぇ。

## お休み、ブリュンヒルデ

はてはてさてさて、一体これはなんでしょーか？私には理解出来ないでありますですよ。なーして千冬先輩の部屋に呼ばれたんでしょうか？仕事用のケータイに連絡きたから、大事かとおもったんですが。

いざ行ってみれば、大量の缶ビールが並べられていて、千冬先輩がそれの１つを飲んでいた。にー、しー、ろー、やー、とー、にー、しー、ろー、やー……１８杯。千冬先輩……明日も授業ありますよね？

「祝いだ。遊姫、オマエも飲め。私が許すから」

「いや、遠慮します。既成事実作られそうなんで」

互いに酔った状態でガバッなんてされたらヤバいですからね。私は男の子が好きなんです。だけどけしてショタじゃないです。小さい子は動作のひとつひとつが可愛らしいけどね。

「……その手があったか」

あのー、千冬先輩。聞こえないように言ってるかも知れませんが、ぜーんぶ聞こえちゃうぞ。

……何の祝いなんですか、そういえば？

「祝いの内容は？」

「決まっているだろう、一夏だ。負けたとは言え頑張ったんだ。姉として嬉しいに決まっている」

酔いの勢いか、饒舌です。

「なら、一夏くんに言ってあげれば良いじゃありませんか。ニコニコ笑って、頭をなでなでしちゃえば良いんですよ」

「それで調子に乗らす訳にはいかない」

はっはぁーん、なんだかんだ照れちゃって。素直に褒めれば。一夏くんはそこらの奴とは違うから図に乗ることはないぜぃ。

千冬先輩が缶ビールを飲み終わるタイミングで新しいのを手渡す。私の努力が実ったのか、みるみるうちにビールが空になっていく。やがて酔い潰れて寝てしまった千冬先輩を頑張ってベッドの上まで運ぶ。少し重いッス、千冬先輩。ち、違いますよ。その、千冬先輩が太ってる訳じゃありません。ただ、私が面倒で真面目に力をいれなかったからです。

ん？なんです、千冬先輩。タンクトップの裾を引っ張って。伸びちゃいますよ。……にゃー！？引き摺り込まれた。分かりやすく言えば、千冬先輩に抱き締められながら向かいあって寝ています。羨ましいか、羨ましいか。そんなに羨ましいなら変わってやんよ。

……千冬先輩。……まぁ、千冬先輩も何かしら頑張ったと思うので、今日は一緒に寝てあげます。別に抜け出せないからじゃない。かなり頑張れば抜け出せるしこんなの、ぎりぎり余裕だし。……とにもかくにも、千冬先輩へのご褒美なんだもん。諦めじゃないもん。

……お休みなさい、千冬先輩。襲わないでください。

## 大人だけど怒られました…子供に

朝だー、ＩＳ学園だー、保健室だー。今日もいっぱい仕事しちゃうよー。

ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるー。

……気持ち悪い、回り過ぎた。相棒のキャスター付きの椅子に座ってゆるゆるーっと回転。止められないよ、私の回転は。

とかなんとか言って、足でバシッと止めちゃう。うーん、ふぁんたじー。

そういえば、昨日のクラス代表を決める無益？な戦いは、如月（キサラギ）詩音（シオン）が優勝したらしい。らしいのは、真耶ちゃんから聞いたから。あのもうひとりの男の子くんは如月くんって言うんだね。一夏くんがセシリアちゃんにあんな負けかたをした後、何故か千冬先輩に引き摺られて一夏くんを叱咤しに行ったからなーんも知らない。……私は叱ってないよ。代わりになでなでなでなでしました。一夏くんの顔が赤かったねー。お姉ちゃんがの前で照れ臭いか。それとも私のなでなでがそんなに気持ち良いのか、このバカタレがぁ！！一夏くんの頭をなでなでするのは気持ち良かったわ。あの時は、千冬先輩……恐かったんだ。

いつも通りにお茶をすすりながら、微睡む。

……………。

………………。

コンコン。

んに！？

な、何だ!?寝てない寝てない。い、今ご飯食べてました。寝てませんよ、ご飯食べていたんですから。……何で必死なんだ私?

「失礼します」

保健室の扉が開かれ、見知らぬちっこい娘が顔を見せる。何か驚いているね。……ハッ、まさかこの娘、かの有名なサボタージュ……サボりかい。やらせはせんぞ、この私がいるかぎり。

「どーしたの?」

世の中ファーストコンタクトが大事だから、優しくニッコリいきますよ。

「あの、道に迷って…」

恥ずかしそうに言うちっこい娘。
ごめんなさい、何か勘違いしたみたい。

「オーケー、とりあえずお茶しましょ」

椅子に座ったままで新たなキャスター付きの椅子を出してちっこい娘に座るのを促す。んー、何か急いでる?

「なーに、イライラしてんの」

「してないわよ!!」

はい、怒られました。最近我が強い子が多くて困っちゃう。
あう……帰っちゃった、ちっこい迷子ちゃん。お茶、用意したの

に。まぁ、飲みますけど。

## 連帯責任ですか、千冬先輩

雨はざんざんざかざんざかざん。外を見ても雨なんて降ってませんが。

あの後あのちっこい迷子ちゃんは目的の場所に着けたのかな？私は心配なんですよー。なんせ、昨日の話ですから。まさかまさかと思うけど、１日中迷子ちゃんな訳ないよねー。まぁ、例え迷子ちゃんでもいつか運命の案内人に出会えるでしょう。神に祈りなさい。

我が相棒のキャスター付きの椅子に座りながら、朝から保健室に駆け込んで来たお転婆ちゃんを治療していまーす。出勤と同時に仕事だね。ははは、朝イチで怪我ってどうなんだい、真耶ちゃん。しかも絆創膏貼っとけば程度の。

……サボり？学級崩壊？同僚による嫌がらせ？さあ、どーれだ。

「遅れそうになっちゃいそうだから急いでですね……転びました」

……ですよねー。真耶ちゃんだもん、大事にはならないよう。あまりに心配でちょっと自作自演の悲劇のヒロイン劇を思い浮かべました。絶対に言えない。

「気をつけたまえ、真耶ちゃん。世界はちょっとした痛みに溢れちゃってんだから」

ぐるぐるーっと二回転位キャスター付きの椅子で回る。しーかーいーがー回る。

「遊姫さん、あまりの痛みに教室に行って授業出来ません。なでなでしてください」

上目遣いでそーんな危険な事を言う真耶ちゃん。君はアレか？……

アレ？なにそれ？てか、おもいっきり仮病じゃん、真耶ちゃん。いつからそんなに悪い子になっちゃったんだい。毒されたか、毒されたのか君の受け持つクラスに。
前を開けたままの白衣から紙を取りだし、傷の内容などを書き込む。なでなでなんてしないよ、真耶ちゃん。だから、ウルウルした瞳で見ないで。電話しちゃうよ。なーんて言いながら仕事用のケータイを取り出します。次に通話したい人に電話します。用件を言って３分ほど待てばー、あっと言う間に……千冬先輩ー。

私の視界にはゆっくりと開かれる扉が見える。謎のオーラを纏わせながら、千冬先輩がゆらりゆらりと真耶ちゃんの背後に忍び寄る。目が光って、口から煙が出てる……なーんて事はないっス。普通に扉開けて、ツカツカと真耶ちゃんの背後まで行って出席簿を振り上げる。気のせいか、笑ってるよこの人。
バシン！！って言う音と共に真耶ちゃんが正面、つまり私の方に倒れ込む。まじかい。奮闘してないから虚しく真耶ちゃんに押し倒される形になってしまった。キャー、真耶ちゃん大胆。

「えへへ、遊姫さん柔らかい」

良かったね、後ろに般若がいるよ、どうなっちゃうんだろ？

「やーまーだーくーん、ゆーうーきー、何をしている」

アハハ……ハハ、私もですか千冬先輩。

## 脱線種　3対1だから無理もない（前書き）

思い付いたから外伝的なモノを書きました。読まなくても大丈夫です。本編に絡んでないから。

## 脱線種　3対1だから無理もない

狭い狭い場所で私は、元気にやってます。どれくらい元気かを例えると、目の前でザクウォーリアがアビス、ガイア、カオスに囲まれていても笑えちゃうぐらい元気です。アハハ……笑えないなー、私は。

ちなみに私はスラッシュザクファントムに乗ってます、深緑色の。パイロットスーツは着ていません。タンクトップにジーパンです。一応ザフトの軍人さんです、非番でしたが。

そんな中で敵さんがセカンドステージシリーズの機体3機を奪って、アーモリーワンの所々を破壊。私は適当なモビルスーツ格納庫に行くと、今私が乗っているスラッシュザクファントム深緑カラーが鎮座していて、足元に瓦礫に押し潰された赤服エリートさんが居ました。エリートと言えども所詮は人間か、なーんて思いながら拝借、起動。

凄い！？ジンより強いし、動くぞコイツ。

雰囲気に合わせてバッて飛び出すと、ザクウォーリアが1機で新型にリンチされてた。新型……恐るべし。

とりあえず、背中のガトリングビーム砲で牽制しながら、突撃する。

「えぇい！！」

腰のビームアックスを振り回し、3機を遠ざけ、構えて様子を見る。するとカオスの背中が爆発する。欠陥機かな？

なーんて思っていると、ちっこい戦闘機と上半身、下半身が空を飛んでいる。私たちの緊迫した雰囲気も知らずに空中で合体しちゃったよ。合体中に落としちゃえば良いのに、もったいない。

落ちてきたガンダムタイプ、ソードインパルスが2本のエクスカリバーを振り回しポーズを取る。きっとコクピットの中で名台詞言っ

てんだろうなー、中二病。
まぁ、頑張って。

「がいあ」のスピードに翻弄され、「かおす」の足についてるビームクロウに腕を切り裂かれ、「あびす」の肩部シールドの連装ビーム砲で足を撃ち抜かれる。
あれ？前半の主役シン・アスカくん弱すぎない？……現実だからかな。実際、均衡した性能で３対１ならこんなもんかー。
あまりに可哀想なので助けに行こう。

## 寝不足だから寝て良いよって

愛と勇気だけが友達だー。コレは……愛す心と自分が振り絞る勇気だけが、自分を裏切ることのない友達ってことか。……どーゆー事だい？

私の知り合いはドイツもコイツも危ないね。千冬先輩は道を誤ったし、真耶ちゃんは道を誤ったし、今はもう居ない例のあの人は道を誤ったし。だからって朝から酷いです、千冬先輩。もう居ないから何も言えないけどねー。私も保健室に居ないしねー。

じゃじゃーん、料理研究部の調理場でーす。何と保健室に買い置きしていたお茶菓子が無くなっちゃったんだ。だから今日のお茶菓子は自分で作るしかない。思い立ったら何とかって奴です。だーれにも許可無く侵入して、くっきー言う海の向こうで食べられている物を作っていたんだ。今は普通に日本でも食べられているけどさ。パパパっと作りましたー、別に手は抜いてないよ、ほんとだよ。

クッキーの入った包みを持ちながら3階の廊下をランランルンルンと歩く。授業中だから誰も居ない廊下をくるくるーっと回転しながら進む。

自由自由で楽しいなー。お菓子もあるし、お茶もある、さらに自由。世界は優しい。

りりりりりりん！！

レトロな着信音が白衣のポケットから聞こえてくるくる。世界は優しくない。どーやらメールでの呼び出しらしいんだね。場所はグラウンド……遠い。

とりあえずスタートダッシュ！！患者が待っている。

できるだけ音をたてないように全速力で走る。今から階段で1階まで降りるのは面倒だから、グラウンドが見える窓から勢いよく飛び

降りる。うわーん、死んでやる。

3階の高さが恐くて保健の先生が出来るかー。

着地すると同時に転がって受け身を取る。その勢いのままグラウンドに走るものだから、遠くグラウンドで私を見た生徒さんが固まってる。

コイツ等……1年生だな、驚いてやがる。

まぁ、常識的に3階から勢いよく飛び降りたらビックリだね。そんなことより患者だ。

「怪我人はだーれだ？」

手近な先生に質問しちゃいます。

「そこにいる更識です」

先生さんが内気そうな少女を指差す。こら、人を指差しちゃだめでしょ。

「月村先生は常識の外の人ですね」

「はい、そこ黙る。私も苦労してんの」

足に怪我している更識ちゃんに近づき、様子を見る。うし、簡単。保健室に行こうか少女S。

と、言うわけで保健室。

更識ちゃんをキャスター付きの椅子に座らせ、私も自らの相棒、キャスター付きの椅子に座って向かい合う。

「更識ちゃん、私はひじょーに悲しい」
「何が…ですか、月村先生」
何か敵意を感じるよ、更識ちゃん。
「このＩＳ学園は体力戦だよ。健康管理についてはあまりどうこう言わないけど、寝不足でこーんな怪我をしちゃうのはどうかな？」
「先生には関係ないです」
目も合わせないでなーに言ってんの。
「関係ないですなら仕方ない。……クッキー食べる」
包みを開いてクッキーを１つ摘まむ。うーん、ほどよく甘い。
「いりません」
閉鎖てきだな更識ちゃん。お姉さん悲しいよ。
「糖分は脳に良いんだよ」
「……いただきます」
うん、素直でよろしい。
「眠いなら寝てもいいよ。授業に置いていかれても良いなら」
クッキーを小動物の様に食べる更識ちゃんにそう言ってみる。悪魔

の囁きみたいにね。私は自分の発言に責任を持てません。
とかなんとか言ってたら、ベッドに潜り込んじゃったよ、この娘。

「はい、お休み」

ま、気にしなくて良いか。

「……お休みなさい」

……先生、頑張っちゃう。

## ジョーカーの使い所を間違えた

更識ちゃんが睡眠して起きて自分の教室に帰って行った後、私はのんびりぐーるぐる。相棒のキャスター付きの椅子に座って回転中。ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるグー。

もうお昼じゃないですか、どうりでお腹が鳴る訳です。いやぁ、朝からてーへんでしたな。更識　簪ちゃんもてーへんでしたなー。とりあえずご飯です。食堂に向かって行ってくるぜ、いつもは自作の弁当なんだけどさー。千冬先輩に襲われたくないし。

食堂にとーちゃく。うーん、人が沢山混んでるな。さーて、問題は目の前にちっこい迷子ちゃんが仁王立ちしていること。……キサマ……先生に楯突くのか。ラーメンがどうにかなってても知らないよー。

「やあ、ラーメンウーマン奇遇だね」

「誰がラーメンウーマンよ！！」

お、おお、怒鳴りますか。

「なら、貴女のお名前どーぞ」

右の手のひらを突きだして、この手に言いな！！なーんてやってみる。どうだ寒いか虚しいか……はい。

「凰　鈴音よ」

ありがと、りりりりりん音ちゃん。別に良いけど、先生には敬語な、敬語。あまりに傍若無人な振る舞いしちゃうと私、泣いちゃう。泣く気は無いけど。

「お、遊姫先生」

んんんー、この声は一夏くんじゃないですか。
くるりくるりと振り返れば、一夏くんといつぞやのサムライガール箒ちゃん、ぶるーてぃあーずの人セシリア・オルコット、知らない男の子如月　詩音。なーんと約1名を除いて豪華メンバー様ではないですか。

「やぁ、一夏くん。せっかくだから奢って」

先制パーンチ。

「いや、教師が生徒にタカらないでください」

「お堅いな一夏くん。いつもの通りでかまわんよー」

ほほほっと笑ってみる……何かかぶった？

「遅いわよ、一夏」

私の後ろから怒声が。そういえばいましたね、鈴音ちゃん。
嫌な予感がしたのでご飯も食べずにそそくさ撤退します。一夏くんの周りは爆心地だからね。

今日の業務が終わり、私は寮の自分の部屋へと撤退するのだー……

うん？何か喧嘩してる？
いっそいで近づくと、一夏くんと箒ちゃんの一方的な愛の巣の前で、一夏くんと箒ちゃんとボストンバックを肩にかけてる鈴音ちゃん。
……修羅場だ、カメラカメラ。

「遊姫さん、助けてくれ」

ちょ、一夏くん、野次馬でしかない私を巻き込まないで。

「月村先生、私と一夏はこの部屋で充分です！！」

……はい？

「ちょっと、一夏は私と一緒の方が気を使わなくて済むから代わった方が良いに決まってるわよ。ね、月村先生」

……知らないよ。
でもこのままじゃ面倒ですぜ。しーかたがないのーでケータイ出した。

「控えろー」

「黙ってください！！」

「うるさい！！」

ぐすん……最近の子達がおっかない。でも負けない。だって、保健の先生だもん。

「動くな！！織斑先生呼ぶぞ！！」

ピタッと止まる箒ちゃんと鈴音ちゃん。ふふふ、この事態がバレたら私もヤバい。もはや、一か八かの賭けだ。

「呼んだか、遊姫？」

ゾワっとした！？今、ゾワっとしたー！？
恐る恐る後ろを振り向くと、笑顔の千冬先輩がいた。

「千冬先輩……こんばんわ」

ぽんっと肩に手を置いてくる千冬先輩。私を抱き寄せガッチリとホールドしてくる。
ニャー、ごめんなさいごめんなさい。

「凰、自分の部屋に戻れ」
千冬先輩の笑顔に3人が帰って行く。うそ！？見捨てないで。

「さて、話は私の部屋で聞かせてもらおうか」

ニヤニヤしながら死刑宣告してくる千冬先輩。真耶ちゃん助けて。

「山田くんに仕事を押し付けて正解だったな」

ニャー、助けが来ないのか。ヤバい、ヤバいよ私。もう妥協案を出して逃れるしかないんじゃないかなー。あんまし気が乗らないけど命には変えられない。

「今日一緒に寝るで勘弁してください」

## 脱線黒　恋次くんは噛ませ犬（前書き）

見なくても問題ないです。だって本編に絡んでないから。タグに転生って書いてあると言うことは……！？自己の判断に任せます。

## 脱線黒　恋次くんは噛ませ犬

「ルキアを…助けに行きます」

「ならぬ」

「どうあっても通しては貰えませんか」

「二度は言わぬ」

ドドーン！！とか言ってみる。言ったら斬られそうだけど、朽木白哉隊長に。

私は現在、高い所から朽木白哉隊長と一緒に阿散井恋次副隊長を見下ろしていまーす。いやー、絶景かな絶景かな。

「朽木隊長、とりあえず任せてくださいな」

隊長に気に入られるための点数稼ぎ。もち、下心ありです。ね♪って朽木隊長の方を向くともう居ない。容赦が無いな。

「と、言うわけで私と勝負だ恋次くん」

高い所から「とう」って飛び降りる。

「遊姫さん、通してください。アンタとは戦いたくない」

斬魄刀構えながら言うことじゃないぜー、恋次くん。

腰にさしている私の相棒を抜刀！！本物だよ、斬れるよ、模擬刀じゃないぞ。

目線を恋次くんに合わせると、連結刃の蛇尾丸が勢いよく向かってくる。……にゃー！！横に飛び退いて避ける。セーフだね。

「遊姫さん、アンタは三席で日頃斬魄刀を振るわないで報告書を書いてばかりだ。俺には勝てない。だから退いてくれ」

恋次くんの慈悲って奴かな。でもね……恋次くん。

「卍解しなよ」

おお、驚いてる。言ってみるものだね。

「私を倒してみろー」

ばばっと斬魄刀を構える。何かやられ役みたいだね、私は。

「卍…解！！」

うえ！？マジでするんすか！？

「狒狒王蛇尾丸！！」

お、大人気無いな、恋次くん。でもね……弱いよ、私。

獣を模した巨大な連結刃、狒狒王蛇尾丸が突っ込んでくる。

キャー、やーられーる。なんちゃって。

私の射程範囲に入った狒狒王蛇尾丸の先端部の頭を蹴り上げる。

「な！？」

はい、ざーんねん。
瞬歩で懐に入り込み、必殺の蹴りを叩き込む。
「かは！！」
倒れる恋次くん。やり過ぎたか？まあ、恋次くんは硬いから大丈夫だよね。負けたままじゃ可哀想だから、ヒントを与えてしんぜよう。
「東仙要」
倒れている恋次くんの耳にそっと一言……優しいなー。じゃーねー。
絶景かな絶景かな。激しい戦いしてるねー、黒崎一護くんに朽木隊長。圧倒的に朽木隊長が上ですね。まあ、卍解初心者で高々十数しか生きていないから、朽木隊長の敵じゃないのねー。お、虚化した。逆転劇の始まりだね。
決まったー、一護くんの勝利なんてことにはならないのが、人生ですね。虚化を無理矢理解いた後の一騎討ちで負けましたねー、ふっしぎー。力技で勝てる訳無いのに。仕方ない、行きますか。
ボロボロの一護くんと朽木隊長の間に立つ。
「やーやー、我こそが月村遊姫なり」
「退け」
スルーしますか。
「退けないですよ、私も色々ありますから。退けたいのなら、どう

ぞ頑張って退けてみてください。ただし、勝てたらの話ですが」

斬魄刀を抜刀して構える。

「吹き鳴らせ…風撫（かざなで）」

私の斬魄刀が長い槍に変化する。

「桜の木は散り逝くだけだよ」

## 初めての食堂、鯖の味噌煮定食

……あ……うん……朝？
……おはよー……ございます。身体が上手く動かない。……あうあ！？そーいえば、千冬先輩の部屋で一緒に寝たんだ昨日。

「…起きたか」

隣に寝惚け眼の千冬先輩がいました。うーん、抱きつかないでください、私にも世間体がありますから。どーでも良いけど暖かポカポカで気持ち良いねー、溶けちゃいそう。
千冬先輩を剥がして、ベッドから降りる。
新しい朝が来たんだー、希望の朝が。希望峰にでも行こうか……無理ですが。
とりあえず、準備運動。寝起きの身体は硬いからね、ハードな1日頑張ります。ちなみにパジャマです。寝るときまでタンクトップは無いわー。パジャマの柄は迷彩カラー。たまたま見つけたから買いました。店員さんがすんごい目で見てました。売らなきゃ良いじゃない、そんな目をするなら。
クイクイっとパジャマを引っ張られる。

「…しゃわあ」

しゃわあ？シャワーですか？あの通りを右に曲がって突き当たりを左です。違いますよー。

「千冬先輩、顔洗って来てください」

「……うん」

素直ですね。ふらふらの千冬先輩を見送ると部屋にある備え付けの冷蔵庫を開ける。ババーン！！……ビールにおつまみ……朝は食堂ですか。

「おはよう、遊姫」

ビシッとした千冬先輩がやって来る。顔がほんのり赤いぞ、千冬先輩。大丈夫です、私は見てませんから。ベッド下のＢＬ本なんて知りません。実際無いしね。

千冬先輩と一緒に食堂に行っちゃいます。ランランルン嬉しそうだね、千冬先輩。食堂までの道をくるくる回りながら私も付いていきまーす。ぶつからない様に気を配ってます。当たったらなるべくしてなったってことで。

千冬が食堂に入る、もちろん私も。

「だらだら食べるな！！」

朝から理不尽だね、みんなビックリ私もビックリ。まあ気にせず、注文しに行くけどね。

「朝から鯖の味噌煮定食お願いしまーす」

くるくるくるくる回りながら待ちます。いつもよりゆっくり回るよー、迷惑になるからね。だったら回るなーって話なんですけどね。ほら、地球って自転してるじゃん。だから私も回ってる。

「はい、お待ち」

「やー、どーも」

美味しそ美味しそ嬉しいなー。日頃は自室に備え付けられたキッチンで朝御飯やってるから、新鮮だ。

ど・こ・に・座ろうかな。君に決めた。

「相席失礼、おはようね」

適当な席に座ると、なんとそこは不思議な世界。一夏くんと鈴音ちゃんの間に不穏な空気が。朝からしんどいオーラを醸し出すなー。

何とかしなさい、詩音くん。……なーに、イライラしてんのさ、お三方。私の記憶によれば……なーんかあったんだよきっと。詩音くんについては知らない、本当に知らないんだ、信じてくれ。

そんなことより、ご飯ご飯ー。……うまうまー。

## 転生転生って実際に口走るとイタイよね、如月くん

保健室はいつもと変わらず平和です。どのくらい平和かと言えば、目の前に簪ちゃんが居るくらい平和だぜぃ。なーんの用かな簪ちゃん。宗教勧誘ならお断りしますよ、それ以外もちょっとお断り。私の相棒、キャスター付きの椅子に座り、簪ちゃんを見る。大体簪ちゃんが此処に来た理由が分かる。ズバリ、私とお話に来たんだね。嬉しいな楽しいな愉快だなー。

「ベッドなら空いてるよ」

本当は私とお話に来たんじゃないことくらいわかってる。でもでもでもね、例え1パーセントの可能性だったとしても……私とのお話が1パーセント……悲しいなー。私に興味無いのか、ベッドに潜り込んじゃう。

「はい、お休み」

どのタイミングでも挨拶は大事だよ。挨拶は心と心のぶつけ合い。激しいね。

「お休みなさい」

……良い子さんだね、簪ちゃん。ぐっすり休んでね。簪ちゃんが寝入るのを確認すると、いつもの様にぐるぐる回転。ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるー。そーいえば、もうすぐクラス別対抗戦の季節ですな。また、血で血を洗う残虐ファイトがみられるのかな。べっつにそんなの無かったし、興味も無いからきーにしない。

コンコン。

んんんー？だーれかな？……強盗かな？

返事もしてないのにドアを開けた。おいおい、返事を待ちなさいよ返事を。私が着替え中だったらどーするの……ああ、それが狙い。ずーずーしくも聖域に足を踏み入れる、イケメンタイプＲ４４こと如月　詩音くん。今授業中だろー……あれ、昼じゃんもう。いやー、時の流れは早いね。私はいつでもマイペースを貫きますがね。ところでなーんの用だ。押し売りならおっことわりー。家に帰るよろしー。

「どったの？」

マジでどーした。頭でも痛いの？

「月村先生、アンタ何者だ？」

……ごめんなさい、哲学の問答は苦手なんだけど。

私が何者か？とってもとっても難しい問題を投げ掛けるね。私は……考える葦かな。

「あいむ、ゆうき・がつむら。ないすとぅみぃとぅ」

「いや、そんなたどたどしい英語の自己紹介を聞きたい訳じゃないんだが」

「いひ、はいせ、ゆうき・がつむら」

「何語！？」

んー、分かんない？正解はドイツ語でしたー。わー、ぱちぱちぱちぱち。

「で、頭の中以外に何処が痛いのかな？」

さっきの問いで頭がイタイ子なのは分かったからね。他に何処か怪我してないかな？先生退かないから話してごらん。大丈夫、私を信じて。

お、簪ちゃん起きた。

「おはようね、簪ちゃん」

「……おはよう……ございます」

挨拶大事だね、見習えイタイイケメン如月くん。

「はいこれ、担任に見せなさいな」

簪ちゃんに1枚の紙を渡す。いつぞやの魔法の紙、保健室の利用カード。これが無いと怒られちゃうからね、ちゃんと見せるんだよ、簪ちゃん。

「お大事にー」

簪ちゃんが居なくなったから、如月くんと2人きりになっちゃった。

……千冬先輩でも呼ぼうかなー。

「アンタ……転生者だろ」

……は？な、何をいいいってるのかな？私、転生分からないよー。とか言ってみようかな。んー、まあ、アレだ。

「今から信頼できる医師の居る所を教えてあげるから、メモしなさい。もう、ＩＳ学園の授業が大変だからって、そーゆーのは止めなさいな。私が学生の頃もそーんな事言う後輩が居たんだよ。まあ、その娘は今、漫画家になってるよ。半月毎に病院に連行されてるけどね。……いいかい、イタイ事言ってると友達人口が減っちゃうぞ」

べっつに如月くんが気にしないなら構わないけどさ。私の頭のイタイ後輩も周りを気にせずイタイ発言をしてるから、私以外に友達いなかったよ。ちなみに、その娘のクラスの人達から「分け隔ての無い頼れる先輩」と私は言われてたんだな。いやー、私みたいな無能な先輩を持つと後輩は麻痺しちゃうねー。

さあ、メモか何かの準備をしたまえ。紹介する医師の住所を言いますよー。はい、３…２…１…ごー。

「えっとねー」

「別に異常なんてありません！！」

怒っているのか怒鳴り散らしてくる如月くん。……スタンガン何処仕舞ったかなー。べっつにいいや、スタンガン無くても。だって……

「食堂に行くぞ、遊姫」

千冬先輩が入って来たから。お昼に食堂行くって約束したからね、指切りならぬ指契りで。指を切ったりちぎったり、どんな拷問ですか千冬先輩。

「如月、怪我か？」

千冬先輩が生徒に接するいつもの調子で如月くんに問いかける。いつもの調子を知らないけど。

「……いえ」

「用が無いなら今すぐ戻れ」

千冬先輩に睨まれた如月くんは焦った顔でピューって逃げていった。自称転生者くん、頑張れよ。私でさえ頑張ってんだぞー。ま、千冬先輩が相手じゃ無理か。

「まったく、ませガキごときが遊姫に色目を使いおって。……よし、昼だ。食堂に行くぞ、遊姫」

フッと笑った千冬先輩が私に手を差し伸べてくる。……千冬先輩、前半聞こえない様に言ったようだけど、聞こえちゃいましたにゃー。

## 状況に合わせた対応を

ひゅーん、がきんがきん。ぼしゅー、がんがんがん。
何で、何で私を捨てたんだ。
違う。オマエを守るためにオレは。
問答無用！！

……アフレコです。
トーナメントが始まりました。一夏くんと鈴音ちゃんがぶつかりあっているよ。近接戦闘用ブレード、名前は忘れたけれど。それを振り回す一夏くんと青竜刀を2つ連結させたモノを振り回す鈴音ちゃん。んー、どっちも振り回してるね。あんまり、長モノ振り回すなー、危ないだろ。
私の隣には千冬先輩と真耶ちゃんが居るのよ、これがまた。あと箒ちゃんとセシリアちゃん、如月くん。如月くんはちらっちらちらっちら此方見てくんなー、本人気づかれてないと思ってるみたいだね。千冬先輩と真耶ちゃんがちょー警戒。自分の受け持ち生徒を警戒って、如月くんの問題児。私も気づいてるよー、舐めるような視線に。べっつに舐めるような視線ではないんですが。
あのさ……千冬先輩の醸し出す不穏なオーラがすんごいんだけど。
一夏くんがちょっと追い詰められている事と如月くんの視線が原因でさー。
真耶ちゃんも腕に引っ付かない。胸が当たってるよー。そーゆーの、大好きな男の子にしてあげなさいな。

「一夏くん負けてるねー」

「衝撃砲が原因ですね」

私と真耶ちゃんがのんきに会話しちゃってます。真耶ちゃん、貴女の生徒ですから応援しなよー。私は保健の先生ですから怪我した者の味方です。仮病なら容赦なくボコる。なーんて思ってる間に一夏くんが奥義「いぐにっしょんぶーすと」を発動。鈴音ちゃんとの距離を一気に詰めちゃう。

「一夏くんの勝ちだねー」

「そうですねー」

真耶ちゃんと顔を合わせて「ねー♪」ってしてると、アリーナのシールドがいきなり破られ、侵入者が来ちゃいました。この愛憎劇場に水をさすなんて、教育がなってないなー。
周りが慌ててるね。真耶ちゃんはあたふたしてるし、千冬先輩はコーヒーに塩入れてる。味覚がバカになっちゃったのかな千冬先輩。
とりあえず、私も慌てておきますかー……わー、どうしよどうしよー、助けて救って頑張って!?

「落ち着け、遊姫!!」

千冬先輩が抱きついてきたー!?しまった、状況に合わせたらとんでもないことにー。……千冬先輩、何で嬉しそうにしてるのかなー。貴女の弟さん、命懸けの事態ですけど……信頼なさってるんですね。うーん、いびつな形ですなＩＳさん。頭が無いし、腕は長いし、ビームは撃つし。節操無しだね。まあでも、一夏くんと鈴音ちゃんの元に援軍が現れましたから、たぶん大丈夫でしょー。怪我したら何とかしちゃいまーす、……生きてたらね。流石に蘇生術は習ってないからー。いつかは必修になるのかな、保健の先生も。
そんなこんなで現れた如月くん。変なＩＳだな、如月くん。私に間

違いがなければ、そいつはストライクフリーダムじゃないかねー？
自称転生者くん、パクりはマズイよ。どーやって手にいれたんだ？
気にしないから、どーでも良いや。だから真耶ちゃん、抱きつかないで。

「舌がおかしくなっちゃいますよ、遊姫さん」

なーんの話？さっきの塩コーヒー飲んだの？いくらのどが渇いているからって。

「やるな、如月は」

真耶ちゃんを処刑した千冬先輩が如月くんを見ている。そのまま、恋しちゃえばー。べ、べつに千冬先輩の事を思って言ったんじゃないから、違うから。うん、違うよ。

「だが、ＩＳの性能に頼っているな」

あれ？今、緊急事態だよね。まあ、いつも通りに振る舞えるのは美徳だよね。

「遊姫の足元にも及ばないな」

訂正、状況に合わせることは大切だね。だから真耶ちゃん、離れましょう。舌を出して、治療して欲しそうに見ない。私は怪我人の味方だけど、自業自得だよね、真耶ちゃんの場合。大丈夫、マウントポジションでフルボッコなーんてしないから。千冬先輩が変な勘違いしたら大変だからね。
代わりに撫でちゃう。
なでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなで。

「はふぅ」

さらさらふわふわ気持ち良いね、真耶ちゃん。シャンプー何使ってるのー。

「やーまーだーくーん」

とっても良い笑顔の千冬先輩が私の後ろから抱きついてくる。

「遊姫が嫌がってるじゃないか」

初耳ですね、千冬先輩。眼科に行ってください。今の状況が1番恐いです。涙が出そうです。

「織斑先生こそ、遊姫さんがぐったりしてます」

いや、諦めの境地なの。ああ、保健室に帰ってぐるぐるぐるぐるまったりふにゃふにゃしたいのさ。

## インフィニット・ヴァルキリー

なんとぉー、新しいケータイげっとだぜー。いやいや、ぷらいべーと用のケータイが無いと不便だよ。だ・れ・を・最初に登録しようかなー。

プルルル！！

買ったばかりのケータイに電話だよ。いっやな予感がするんですがね。まあ、でますか。

「もしもし」

「いやー、ゆーちゃんの大好きなたば――」

ピッ、ツーツー。

……イタズラ電話だね。たぶんきっとぜったいイタズラ電話。着信拒否にしなくちゃ。電源もしばらくきーろうっと。

この前起こった所属不明ＩＳによる襲撃は一夏くん達によって、解決したのだよ。私は見てなかったけど。近くに居たのに見てないって、すごいね。スルースキルが上達したのかな。本当は目の前の事態がとんでもなくて、見てなかっただけなのよ。怪我は見るけど事件は見ない。おかげさまで、一夏くんが気絶しちゃった。とーぜん、保健室に直行。怪我無いか見て、ベッドに寝かせて、いつもの紙に容態を記入。仕事してますよー、保健の先生ですから。

一夏くんの容態は問題ないんだけどね、周りがねー。箒ちゃん、セシリアちゃん、鈴音ちゃんの３人の暴走が酷くて酷くて、先生泣き

そう。頑張って追い出して、面会謝絶にしたけどね。後はもう千冬先輩に任せます。

そして今、私は自由となったのだ。だからケータイを買いに外に出ました。
後はぶらぶーらしまーす。いやぁ、千冬先輩が居ないから平和ですよ。ランランルンルンふんわりさわやか。なーんか食べようかな？なーに食べようかな？自由で明るくて気分は太陽ー、熱いぞー、溶けるぞー。

「あ、先輩」

……自由が溶けていく。誰が呼んだか私の名前を。街中で振り向くと言う謎の高等テクニックを披露して魅せる。知っている女性が数人いるね、出会いたくはないね。

「やーやー、先輩。ボクと先輩は赤い糸で結ばれてるんですね。きっと前世は愛し合っていたんですね」

髪を赤と青に染めた眼鏡っ子、私の後輩ちゃん1号。漫画家の蒼朱（そうしゅ）神奈（かみな）ちゃん。ちなみにペンネーム。本名だったらヤバいよ。まあ、ペンネームなら良いって問題じゃないんだけど。名前から分かるように中二病なイタイ子。黙ってれば男性にもてるんだろうね。本名は白季（しらき）　香美奈（かみな）で髪は黒いんだよ。

「やっとみんなが集いましたね。無敵で最強の無限の戦乙女（インフィニット・ヴァルキリー）　結成ですね」

相変わらずイタイな香美奈ちゃん。売れっ子なのに残念だ。

はい、次。

「うっさいし、恥ずかしい！！」

エントリーナンバー2番、ニキ・カラリカ。外人さんで元代表候補。私となーにか分からない事で争った仲。

最後、エントリーナンバー3番。千葉さん。千葉葉子（ちばようこ）ちゃん。煙の匂いが大好きな優等生。隠れタバコを平気でしてた優等生。ＩＳに大量の重火器を積んで戦う、煙い女子。硝煙の匂いが1番らしい。見た目大和撫子なのにー。

「先輩、ボク等と一緒に食事しません？」

香美奈ちゃん、私は今日休みなんだ。千葉さん、タバコ吸わないで、周りがねー、がっかりしてるよ。ニキちゃん、ニコニコしてないで何とかしなよ。

「アッチで食べ放題やってんだぜ。久し振りに行こうぜ遊姫」

久し振りも何も……ニキちゃんと食べ放題に行ったことないんだけどなー。もし、あの時の事を言っているんなら違うよ。

「とりあえず、いつもの場所にいきましょうか」

あまりに人様の視線を集めるから提案。

カフェ「インスタント」

学生時代にみんなで通ってた喫茶店。客の入りは……ビミョーだよ

ね、名前のせいで。手作りなのにねー。

「マスター、いつもの」

香美奈ちゃんが店長に注文を告げてる……伝わってないけど。毎回違うの頼んでたからね、無理もないね。

「内田さん、インスタントカレー」

「店主さん、自宅コーヒー」

ニキちゃんと千葉さんが注文してるから、私もたーのも。

「店長、パック寿司」

美味しいんだよ、名前が手抜きっぽいけど。

## 脱線鋼　褐色の肌男くん（前書き）

見なくても大丈夫。場合によっては続くけどね。原作憶えていたらだけどね。

## 脱線鋼　褐色の肌男くん

書き書き書き書き。ひがな1日デスクワーク。上司が駄目なら部下はゆーしゅー。

「大佐、しーごーとー」

アホの様にサボるロイ・マスタングに警告しますよ。聞こえてないだろうけどね。のんきにリザさんとマスタング大佐の夫婦漫才でも眺めてますか。仲良いからさまになってるね。

「くそ大佐、来たぞ」

「駄目だよ、兄さん」

おお、ちっさい豆とでっかい鎧が現れたよ。口が悪いな、エドワードくん。弟くんを見習いたまえー。まあ、大佐だから仕方ないね。

雨雨降れ降れ母さんがー、知らない男と出ていった。母さんは居ないけど知らない男が居るね。エドくんはオートメイルを破壊され、アルフォンスくんは臓物ぶちまけて。鎧の中がスカスカだね、どーしたの？

とりあえず目の前に居る褐色の肌男をどーしよ？

「何者だ」

おーけー、答えてしんぜよう。我が崇高な名前を聞いて恐れおののくが良いわ。

「いや、通りすがりの一般人です」

「軍服を着た一般人などいない」

ごもっとも。でもさ、制服マニアかも知れたいじゃないか。

「ユウキ、逃げろ！！」

呼び捨てかい、エドくん。まあ、私は自分の出来ることをするだけだ。

「了解！！」

脱兎の如く逃げさせてもらいます、死にたくないからねー。どうせ私は弱虫だよ。

「逃がすと思うか？」

思います。と言うより思いたい。

バァン！！

私があたふたしてると銃声が辺りに響き渡る。……うるさいなー。

「ショウ・タッカーを殺害したのはオマエか」

ま、マスタング大佐！？……なーにしてんの？

銃なんか持って、危ないでしょ！！お姉さんに渡しなさい。

とかなんとか思っていたら、モリモリマッチョのアームストロング少佐？中佐？どっちでも良いや。気にしないし。そのアームストロングさんがスカーさんに拳を放つ。……残念、ハッズレ。

「アームストロングさん、私に任せてくださいな」

デカイ図体をバシバシ叩き、ニコッと笑ってみせる。

「なりませぬ」

「なります」

心配そうなアームストロングさんには悪いが、撃ち落とさせてもらいまーす。

「スカー、勝負だー」

ビシッと指差す。掴まれて折られたら大惨事。

「瞬脚の錬金術師、ユウキ・ルナビレッジが相手をします」

錬金術師と名乗ったら襲いかかってきた。きゃー、変態。

スカーが放つ破壊の腕を足で受け止める。すると互いに接触した場所がバチって鳴る。

「……！？」

驚いているじゃないか、肌男くん。私はバチって鳴ったのに驚いたよ。

「破壊には破壊、相殺させてもらいました」

## 激突　真耶と相棒

元気にいきます、勇気といきます。だから1日頑張れまーす。
相棒のキャスター付きの椅子に座ってのんきします。あぁ、お茶がうまうまだね。お菓子もうまうまで最高です。仕事が無いって良いね。怪我人が居ない証拠だしね。
そういえば、転校生が来たみたいだね。千冬先輩が知らない2人を連れてましたから。金髪の優男くんと何か堅苦しい雰囲気の銀髪女の子。遠目だからよくは分からないけど銀髪ちゃん、眼帯してた？
まあ、関わって生きることは無いんじゃない……怪我以外では。
さてさて、今日の1番はだーれかな？みうっちかなー？簪ちゃんかなー？真耶ちゃんかなー？……まさか、自称転生者くんかなー？誰が来ても受け入れますよー。怪我した人、この手にとーまれ。仮病は処刑すっから覚悟しなー。
ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるーッガシ！！

んんん？誰かな、私の至福の時を邪魔しちゃうのは？おこっちゃうぞー。

クルリと振り向けば……千冬先輩。……千冬先輩！？あれ、その、や、やだなー、冗談ですよ冗談。怒るなんてしませんよ。……落ち着け私。千冬先輩が怪我する訳がないじゃないですか。とりあえず、質疑応答しちゃいます。

「遊姫、来い」

グイーっとキャスター付きの椅子ごと引っ張られて連れていかれるぜぃ。質疑応答も許されない……かなしーなー。

「どーこ、行くんですかー」

「第2アリーナだ」

ほう、実技訓練ですかー。とっても懐かしいですね。でもね、私は関係ないですよ。ああ、実技に怪我はつきものですね。痛いからね、千冬先輩の攻撃。イタそうだからね、如月くんの口激。

千冬先輩に連れてこられちゃいました、諸君達。なーんか、人数が多いなー。合同授業？あ、ちっさい迷子ちゃんこと鈴音ちゃんがいる。

「遅いぞ」

千冬先輩が時間ギリギリの一夏くんと金髪優男くんに注意する。今気づいたけど、3人目の男の子だねー。なーんかあった気がするするするよ。

金髪優男くんに気をとられていると、銀髪眼帯ちゃんが目の前に立っている。おぉ、なーんか用。

「はじめまして」

ファーストコンタクト。挨拶は大事だ。転校？転入生は大変だからなー。

何か怒ってる？

「キサマも教官を！！」

バシッ！！

にゃー！！危ないじゃないかー。いきなり平手打ちなんて。千冬先輩が受け止めなければ痛かったよ、たぶん。

「何をしている、ボーデヴィッヒ？」

ボーデヴィッヒ？ってことはロシ……ドイツの人かな。

「まーまー、千冬先輩。今のはドイツ式の挨拶ですよ」

違うと思うけどね。そーじゃなきゃ泣いちゃう。

「ふん、キサマの様な奴が教官を騙しているのだ」

……嫌われてるみたい。そうだ、京都にも行こう。

一悶着あったけども授業開始。ラウラちゃん、痛そうだね。出席簿アタックで痛めた頭をなでなでしましょうか。

なでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなで――――。

「その手を退けろ！！」

なでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなで。

「聞いているのか！！」

なでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなで。

「じゃあ、おーわり」

キャスター付きの椅子に座りながら、延々と撫でていたから、ラウラちゃんの顔が真っ赤だね……怒りで。一夏くんは面白くなさそうだね。千冬先輩は……ゴメン、視線合わせられない。

「そーいえば、真耶ちゃんは？」

居なければいけない人物が居ないことに疑問ですね。サボりかな？保健室にいるってことはないよね？

「はわわー、危ないから退いてくだ……退かないでくださいー」

空から真耶ちゃんが落ちてくる。ＩＳを纏って、私の方へ。……死んだかな？

とか思いながらかいひー。見事、真耶ちゃんは激突したね……私の相棒に。

**実はかなり吟味してたのよ**

君と出会って数年間、色々な事があったね。日がな1日、ぐるぐるぐるぐるして過ごしたね。……ぐすん。ねぇ、どうしてこうなっちゃったのかな？

「織斑先生、月村先生の目が虚ろですわ」

「気にするな、オルコット。私は気にしない」

ははは、君無しでどうやって保健室で過ごせば良いのかな？

「とりあえず、専用機持ちによるデモンストレーションだ。模擬戦をしてもらう」

「遊姫さん、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「織斑先生、山田先生も壊れました」

「気にするな、織斑。山田先生は元々壊れてる」

くよくよしてもしょうがないよね。そろそろ前を向こう。

「やあ、みんなおはよう。良い天気だね。それじゃあ、授業頑張ってねー」

みんなにエールを送ってアリーナを立ち去る。

「待たんか」

ガシッと左の手首を掴まれる。なーんか青春みたいだね。ははは、女同士じゃなければだけどね。

「千冬先輩、今日はもう駄目ですから、また後日いらっしゃってくださいな」

「戻ってこい、遊姫。あの椅子の事なら私が新しいのを買ってやるからな」

千冬先輩、分かってませんね。あの椅子じゃなきゃ、あの椅子じゃなきゃ駄目なんだ。わざわざ3時間もかけて選んだ椅子なんですよ。知り合いの娘に頼んで改良もしてもらったんだよ。半年に1度メンテナンスもしたんだ。

「いい加減に山田先生も戻ってこい」

「え、私が遊姫さんの椅子になるんですか。私で良ければ永遠に遊姫さんの椅子になります」

バン!!バン!!

んあ!?私は一体何を?電波でも受信したかな?なーんか頭が凄く痛いんだけど。真耶ちゃんがラファール・リヴァイヴを纏いながら悶えているんだけど。なんでなんでISなんか起動してんの。

「よし、戻ってきたか。では凰、オルコット、山田先生と戦え。2対1だ」

真耶ちゃん大丈夫かなー？頭痛そうだね。でも大丈夫。真耶ちゃんギャグ補正みたいなのあるから。

さすが真耶ちゃんだねー。セシリアちゃんと鈴音ちゃんの連携のなさもあるかも知れないけど。いやー、互いに協調性が無いなー。軍属なら要らない子でーすよ。ほいほい頑張れ頑張れ。……あっ、ぶつかった。真耶ちゃんがスキを逃す訳が無く、グレネードで撃墜した……たーまやー。

「教師の実力が分かったか？まあ、凰とオルコットが弱すぎただけかも知れないが」

言葉に容赦が無いですよ、千冬先輩。

「もうひと試合だ。織斑、如月、デュノア、ボーデヴィッヒ、前に出ろ」

いやいや、４対１は無理ですよ、千冬先輩。真耶ちゃんの負担がとんでもないですよー。

のんきに真耶ちゃんを哀れみの視線で眺めていると、千冬先輩が私の肩に手を置いてきましたねー。なーんかとってもヤバイね。嫌な予感がします。

「教師の実力を見せてやれ、月村先生」

……帰ろっかなー。

## 打鉄改打ち直し鎧刀・風撫の不本意お披露目（前書き）

遅くなって二話投稿。完成度は任せます。

## 打鉄改打ち直し鎧刀・風撫の不本意お披露目

「な、なんだってぇー！！」

一夏くんが叫ぶ。別に君がたこなぐりにされる訳じゃないんだから。私が言いたいのよ。まあ、最近は千冬先輩も冗談が上手くなりましたからね。ドキドキしちょうよどうしよう。

「さっさとＩＳを展開しろ」

マジなんですか、そうですか。私に死ねと暗に言っているわけだねー。とかなんとか思っていたら、一夏くん、如月くん、ラウラちゃん、シャルルくんがＩＳを展開している。逃げ場はないのかねー？拒否権もないのかねー？保健の先生だぞー、弱いかも知れないんだぞー。

「遊姫、早くＩＳを出せ」

千冬先輩からの催促。いやー、やりたくないですよー。戦いなんてくだらない、私の弁解を聴けー。

「やりたくないですよー……と言うのは…」

「諦めろ」

「はは、いきますー」

とりあえず前に出る。準備体操を軽くする。足とかグキッとなったら痛いからねー。……よし、終了。でわでわ逃げたい気持ちを抑え

て、白衣のポケットから緑色の布が付いた腕輪を取り出す。
ビックリなんと専用機持ちなんです。どうだなんにも覆すことができないだろー。

「……変身」

合言葉と共にＩＳを展開する。身体がＩＳに包まれて肌の露出が無くなった。……ＩＳスーツ着てないけど大丈夫だよね。いつものタンクトップにジーパン。舐めてるね、ＩＳの恐ろしさを。まあ、全身装甲のＩＳだから気にしない。ズッシリとした身体になりましたねー。普通のＩＳよりも大きいぜー。
全身装甲のＩＳが学園を襲撃したばかりだからあまり良いイメージはないかなー。

「これが私のＩＳ、『打鉄改　打ち直し鎧刀・風撫（うちなおしよろいかたな・かざなで）』だー。とっても長い名前だろー」

深緑の装甲に身を包み、腰の両側に装備された第四型近接戦闘武器『刀改』を取り構える。見た目は日本刀です。日本の企業が製造したからねー。知り合いの人の企業だからね。私のためだなーんて言って趣味全開の機体と武器に仕上げてくれましたよ。鈍重そうな全身装甲に日本刀。ちなみに足がでかい。

「いくよ、勝率は良くて１０パーセント」

空中へと飛び上がり、４人を眺める。
千冬先輩の合図で私達は戦いを始める。

「にゃー！！」

ゴロンゴロンゴロンゴロン。ブザマに地面を転がる私。わぁー、やーらーれーたー。何あれ！？イジメ！？今時流行りの現代的戦闘術イジメですか！？ラウラちゃんの停止結界なるもので止められた後、シャルルくんと如月くんによる弾丸とビームの嵐。一夏くんは優しいね。攻撃して来なかったよ。嬉しいな、後でなでなでしてあげようかな？

「真面目にやれ、遊姫」

いやいや、千冬先輩。私は真面目にがんばりましたよー。４対１が鬼畜すぎなだけですよ。風撫の鈍重なスピードじゃついていけません。

「無理です、千冬先輩」

「嘘をつくな。シールドエネルギーに余裕があるだろうが」

「……な、なんのことやらー」

「真面目にやらないとオマエの恥ずかしい過去をばらす」

にゃー！！それは反則ですよ、千冬先輩。私の過去を人質にとるなんて。

「諸君聴け。月村先生は元代表候補生だ」

あぁ、今からばらすんですか。周りも聞く姿勢をとらないで。

「しかし辞退した。何故だか分かるか」

みんな驚いてるね。あたりまえか、代表候補生になるのは難しいし名誉な事だから。

「この馬鹿は教官に面と向かって『ナンバーワンよりオンリーワンだー』なんて言って逃げ出したんだ」

しー――――――――ん。

にゃー！！ばらされちゃった、恥ずかしい。周りの視線が痛いから、もうギブアップだから。

「よし行け、真面目にな」

ははは……もうどうにでもなれー。

風撫のスラスターを噴かせて突っ込む。

「あ」

ラウラちゃんの放ったレールカノンに激突した。

## まさかの視点　不快の一言

もはやヤケクソなんだろうか？両手に刀改を携えて真っ直ぐ突撃してくる月村遊姫。ホントに元代表候補生か？

この俺、如月詩音は月村遊姫を疑っていた。俺と同じ転生者なんじゃないかと。結果は白。理由は簡単。原作介入をしていないから。転生者なら教室に顔を出して原作キャラにちょっかいを出すだろ。無人のＩＳが現れた時、でしゃばって原作キャラに好かれるようにするだろ。遊姫にはそれがない。ただ、千冬や真耶に好かれているだけだ。遊姫自体はあまり望んでいないが。もし、転生者なら百合な展開を望むだろ。

専用機を持ってるのにはビビったが俺のストライクフリーダムとは天と地ほどに差が開いてる。いや、一夏ですら勝てる程度だ。まあ、弱くても気にしないぜ。なんせあの身体だ。原作キャラ達に負けない位の可愛らしさ。俺より歳上とは思えないほどのものだ。シャルやラウラ達とは違った良さがある。もうすぐみんな俺のハーレムに加わる。一夏みたいな鈍感野郎にはもったいないからな。

おっと未来計画を建ててるうちにラウラのレールカノンが遊姫に命中する。

どかー――ん！！

遊姫が何故か爆発に包まれた。

「遊姫さん！？」

一夏が驚きの声をあげる。

「教官の邪魔をするからだ」

遊姫に嫉妬しているラウラが冷たく言い放つ。
おーおー、言うな。まあ、今はツンツンしていても良いや。デレた時が最高だからな。

「え、あ、月村先生、大丈夫かな？」

優しいなシャルは。一夏なんかじゃなくて、俺が身も心も救ってやるぜ。
ってか、遊姫のＩＳは欠陥なのか？いくらレールカノンでも爆発しないぜ。アレかフラグか。爆発で身体に消えない傷を負った遊姫を俺が慰め受け止める。良いね良いね。

爆発で見えなかった視界が晴れるとそこには何もなかった。……地面に落ちたか？

「な！？」

ラウラが驚きの声をあげる。
何だと思いラウラの方へ向くと、ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンのレールカノンの砲身が遊姫の刀改に切り裂かれていた。

「何だと！？」

思わず声を発した俺。いつの間にラウラの近くに。
そして気づいた。遊姫のＩＳが全身装甲じゃなくなっている。素顔がさらされ、身体の装甲も無くなって、彼女の綺麗な肌か見える様になった。露出具合は一般のＩＳぐらいだが。
深緑のＩＳでスリムになった身体に背中には先ほどまで無かった巨大なスラスターが４つ付いている。１番の特徴は足。大剣と足が合

体した様な特殊な形をしている。ちゃんと2足歩行だ。爪先立ちしている様に見える。

両手の刀改を振り回し、ラウラに反撃するスキを与えず攻撃する。

「くっ、舐めるな！！」

ラウラがワイヤーブレードとプラズマ手刀で反撃を試みるが、遊姫は先ほどとは比べものにならないほどのスピードでワイヤーブレードを弾き、ラウラのシールドエネルギーを0にする。

「群れから離れた君が最初だ」

遊姫はブレードが合体した足でラウラを蹴り飛ばす。

我にかえったシャルが遠距離からアサルトカノンを撃つ。

俺もビームライフルを撃ち、スーパードラグーンを向かわせる。

俺とシャルでかなりの弾幕をはるが、遊姫はもの凄いスピードで射撃を回避していく。あまりの速さに、照準が間に合わない。

「行け、ドラグーン！！」

空中に停滞した遊姫に対して、四方八方からドラグーンで撃つ。

遊姫はただ、踊るように回避していく。

嘘だろ。俺に勝てる訳ないはずだろ！？

いくらドラグーンで狙っても当たらない。それどころかドラグーンの包囲網を抜けられ、僅か数秒で全てのドラグーンを破壊していく。

不可能と言って良いほどの直角の方向転換とイグニッションブーストによる高速移動。

シャルがアサルトライフルを乱射するが、後ろに回り込まれる。シャルが振り向いてラピッドスイッチで変えたブレッドスライサーを構える前に、剣脚の蹴りで弾き飛ばされ、何度も蹴りを食らい撃墜される。

「なめんなよ」

ビームサーベルを構え、ストライクフリーダムのスピードで突撃する。最強の俺が負ける訳がない。
遊姫に接近してビームサーベルを振るう。
遊姫は左の刀改でビームサーベルを受け止め、右の刀改でビームサーベルを破壊する。
嘘だろ、おい！？
瞬時にビームサーベルを破壊されたことに僅かに驚いていると、後ろのウイングを切り裂かれていた。

「言ったよ、勝率は良くて１０パーセントだよ」

剣脚の踵落としを食らい、俺は墜落していく。

## 痛いよ痛いよどんだけー

風の様に流れる。風だ風だ風だー。まずはラウラちゃん、次にシャルルくん、その次は如月くん。誰も彼もがついてこれないね。仕方ないかもしれないけど。私の足でも追い付けません。
どーでも良いけど、残りは一夏くんだけになりましたー。わーパチパチ。君は選ばれたのだ。まあ、攻撃して来なかったから何もしないでおいたんだよね。

「なーんかさぁ……止めない？」

一夏くんに提案します。停戦でーす。私は……一夏くんを傷つけたくない。だって、やる気がないから。

「遊姫さん、俺は早々にやられないぜ」

えー、話聞いてない？戦うのですかい？私は保健室でお茶とお菓子でまったりしたいんだけどなー。もう、男の子だね一夏。

「仕方ないな、一夏くん。……やってあげようかな」

打鉄改打ち直し鎧刀・風撫の背部高出力ブースター『引継（ひきつぎ）』を全開にして飛び上がる。さながら風を思わせる速度で一夏くんに接近。
一夏くんが反応するより速く、肩を斬りつけ抜ける。直ぐ様右に直角で曲がる。風撫の装甲のあちこちに付けられた補助ブースター『後押（あとおし）』と４つの引継が左に向き、無理矢理方向を変えている。
振り返る暇も与えずに後ろから斬りかかる。

「遊姫さん、速すぎ！！」

一夏くんが必死に私を目で追いかけるが、全く追い付いてない。
遅いな遅いな遅いなぁぁ！！もっと速く反応しなさい。君の首が繋がっているうちに。何度か斬りつけた後、少し距離を置いて停止する。身体中が痛過ぎる。
私が止まったのでイグニッションブーストで接近する一夏くん。手に持ったブレードで斬りかかってくる。甘いよ、私を舐めすぎだ。左の刀改で受け流す。そして右の刀改で斬りつける。たぶん、一夏くんには私が刀改を振るうのが見えてないだろうね。腕についている後押で加速させた斬撃が一夏くんを襲う。もちろん私が襲っている。足のブレード『刃身（じんしん）』で一夏くんのブレードを蹴り飛ばし、反撃を不可能にする。後はガリガリ削るだけだね。
四肢の刀を使い、一夏くんのシールドエネルギーを削りとる。引継と後押のスピードを乗せた刀の前に一夏くんは破れた。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い激痛がとんでもない。とっても痛いメチャクチャ痛い。だから風撫は嫌いなんだ。私の戦闘スタイルには合っているんだけど、風撫がハイスペック過ぎる。絶対第2世代じゃないよ。

「よくやったな、遊姫」

貴女がやらせたんですよ、千冬先輩。あ、や、止めて、そこ、そこ触られたら……にゃー！！痛いー！！

「……すまない」

分かっていただいて嬉しいです。

今私はアリーナにある簡易ベンチに横になっています……千冬先輩に膝枕されて。遠くから羨ましそうに見てくる視線とラウラちゃんの刺さるような視線が……身体が痛くて気にならない。ううー、千冬先輩の手つきが優しい。

「皆さん、専用機持ちの人をリーダーに別れてください」

あーあ、真耶ちゃん泣きながら指示してるね。千冬先輩の眼力に負けて授業の舵とり。千冬先輩は私の頭を撫でながら真耶ちゃんを睨む。あのー、2組は兎も角1組は千冬先輩が担任ですよね。別に言わないですけど。あうー、痛みがひかないなー。
みんな一夏くんとシャルルくん、如月くんに集中してるね。ほらみんな、気を付けな。

「出席番号順に班を作れ！！」

ほーら、怒っちゃった。でも撫でるのは止めない、ラウラちゃんも睨むのを止めない。
真耶ちゃんも羨ましそうに此方見ない。君は私の相棒を壊したでしょうが。諦めなさいな、千冬先輩もいるしね。

「ふふふ、フワフワだな、遊姫は」

……真耶ちゃん、かわってちょーだい。

## 打鉄改打ち直し鎧刀・風撫の報告書（前書き）

読まなくても大丈夫です。ただの説明ですから。

# 打鉄改打ち直し鎧刀・風撫の報告書

西島製鉄所で開発されたＩＳについて、私は記録する。

打鉄改打ち直し鎧刀・風撫

深緑色の打鉄で西島製鉄所で開発された月村遊姫専用の高速戦闘型ＩＳ。代表候補生に選ばれた月村遊姫の為に西島製鉄所の工場長が試行錯誤の末に造りあげた特機型ＩＳ。様々なテストで重傷者を出し続けるという、高速に重きを置きすぎて武装と安全性を排除した欠陥ＩＳ。初舞台で敵を体当たりで倒すという芸当を見せた。その後、月村遊姫は壁に激突して中破した。この結果からＩＳに武器が無いことに気がついた開発部が足にブレードをつけた。これにより、扱い辛いＩＳが更に扱い辛くなった。戦闘中に足のブレードが取れる事態に陥る事があったので足自体をブレードにした。
後に様々な問題が露呈して月村遊姫は1年で7回も墜落した。名前の『打ち直し』は改修を繰り返して生まれたことから。

追加装甲『鎧』

打ち直し鎧刀の鎧の部分。全身装甲『鎧』を装着することで防御力を向上させた形態。専用機3体の猛攻も防ぎきるほどに堅い。問題はスピードの絶望的低下。パージすることも可能でパージ時は装甲表面が爆発を起こす。

背部多方向大出力ブースター『引継』

風撫の背部に4機装備されたブースターユニット。瞬間的に加速することを目的としたブースター。曲線もしくは直線の方向転換時のスピード低下を無くし、曲がる前のスピードを維持したまま曲がる

為に『引継』と名付けられた。

補助ブースター『後押』

小回りや姿勢制御を目的としたブースター。高速で武器を振るうためにも使われる。

第四型近接戦闘武器『刀改』

日本刀の形をしたブレード。第四型が示す通り、前に一から三まで存在した。刀身が脆過ぎたり、巨大だったり、使い勝手が悪かったりした。

脚部近接戦闘用固定兵装『刃身』

足自体をブレードにした武器。足にブレードをつけるプランが駄目だと分かり融合させた武器。月村遊姫の足技のおかげもあり、飾りになることは無かった。
この特徴から西島製鉄所では人刃一体と呼ばれている。

**なでなでなでなでなでぎゅーっと**

関節が痛いなー、歳をとった訳じゃないのに。私が痛みに苦労している間、皆さんはＩＳの訓練をしてるねー。……遠くからラウラちゃんがずっと睨み付けてくるんですけど。ちゃんと班の子に教えなよ。手でも振ろうかなー。

横になりながらなんとか腕をあげて振る。激痛が凄いー。あぁ、更に睨みが強くなっちゃった。

「……ボーデヴィッヒは後でシバくか」

なーんか上から恐ろしい呟きが聞こえるなー、やだなー。そろそろ膝枕止めて授業の舵取りしてください、千冬先輩。真耶ちゃんが指をくわえて見てますし。真耶ちゃんも仕事しようねー。

「山田先生、ちゃんと授業を見ろ」

貴女が言いますか、千冬先輩。

「織斑先生、そろそろ生徒達を指導してください」

お、頑張って真耶ちゃん。千冬先輩にやられるだろうけど。

「私は遊姫の看病で忙しい。だから自分でなんとかしろ」

サボり！？あと丸投げですか！？膝枕で頭を撫でるのが看病だろうか？そんな訳ない。頬をつつかないでください、生徒が見ています。

やっと解放されたー。授業中ずーっとぷにぷにされたから頬に違和感がある。うーん、歩ける程度には回復したけど痛いなー。もうベッドで寝るしかないな……保健室の。
壊れた相棒は千冬先輩が真耶ちゃんに回収させたので、知り合いの娘に頼んで直してもらうことになりました。急ピッチでやってくれるらしいです。うぅ、ありがとう桐谷さん。
とりあえず保健室に到着。ベッドに直行してお休みです。

……んんー。

……んんー？暖かい？

……まー、いいかー。

「ふ、ううん」

めざめたぜぇ、ねむねむですが。さっきからふにゃふにゃポカポカ暖かいなー。
パチクリと目を開けると水色が見える。……なーんでー？あぁ、簪ちゃんかー。なーんだ……なーんで一緒のベッドで寝てるんでしょーか？不思議ですね、この事態はなんぞや？

ぱち。

おー、簪ちゃんが目覚めた。まだ眠そうだね、どーするよ。……とりあえずぎゅーっと抱き締めて頭をなでなでします。
なでなでなでなでなでなでなでなでぎゅーっなでなでなでなで

なでなでなでなでなでなでなでなでなでぎゅーっなでなでなでなで
なでなでなでなでなでなでなでなでなでなで。
あ、目を閉じた。お休み簪ちゃん。私ももう少し寝ます。

## 真耶ちゃん？食堂で食べてればー

「はてはてさてさて、どーしてこんなことになったのかな？」

さぁ、答えてちょーだいな、簪ちゃん。とっても気になる今日この頃。何故に一緒のベッドに寝てたのかな？

「ベッドが全てうまっていたから」

簪ちゃんがもじもじしながら言ってくる。

でもなー、理由になってないねー。まぁ、寝心地良かったから良いけどね。てか、ベッドが全てうまってた？おかしい、寝る前は全部空いていたのに。……サボりかーな？だとしたらやっちゃったな。とりあえず、ベッドから出て軽く伸びをする。んー、スッキリだー。よし、サボり魔ちゃん達を探すかなー、手がかりがないけどさぁ。机の上に何かあるか確認しますか。お、おお、書き置き発見です。誰のかなー？

『ベッド借ります。ｂｙ水島うみ』

みうっちだね、これは。おめでとう、みうっち。君は見逃してあげまっしょー。まぁ、生徒を疑うのは止めよう……報復が恐いから。なーんて思ってるともう昼。太陽が真上に来てる時間じゃないですかー。１限の後、昼まで寝たのか私は。……おねぼうさん。けして職務放棄した訳じゃないよ。保健室に待機することが保健の先生の仕事だー。お腹空いたからご飯だー。

机の引き出しからお弁当を２つ出します。

「簪ちゃん、お弁当要る？」

「……良いんですか？」

「うん、ある人に頼まれて作ったけど急に気が変わったから要らないみたいなんだ」

「……いただきます」

どぞどぞ。本当は真耶ちゃんに頼まれて作ったんだよね。私の気が変わったから真耶ちゃんにはあげません。相棒を破壊した報いをうけろー。うう、代理の椅子に座っているけど……座り心地がねー、やっぱりあの子じゃなきゃ落ち着かない。

グルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグル。

回転に違和感が、スムーズに回らないー。回る度にギシギシ言ってる。

不快だ不快だ悲しいなー。今日は厄日かなー。簪ちゃんがお弁当食べてるなー。私もたーべよ。

「簪ちゃん、あーん」

「……！？」

ビックリビックリ可愛いなー。はい、パクリ。美味しいかなー美味しくないかなー気になるよ。

だらららららん、感想をどうぞー。

……。

……。

あれ？

「……美味しい」

なーんか、ほんわかほにゃほゃポッカポカな顔だね、簪ちゃん。嬉しいから撫でちゃう撫でちゃうよー。

なでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなで。

撫で心地が最高です。

## ふっかーっつ我が相棒

遊姫よ、何故にお父さんに手紙を出さない。寂しくてお父さんの方から出したじゃないか。いつからそんなに冷たい娘になったんだい。オマエが小さい頃はあんなにお父さんの事を大好きだって言ってたのに。

ところで、お父さんそろそろヤバいんだけど。家がすんごいヤバいんだけど。遊姫の手料理が食べたいから頃をみて帰ってきてくれ。

父　月村　流五月より

ＰＳ　結婚は許さんぞ。お父さんが死ぬまではやらせはせん。

ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるー。

「えへへー」

忌々しいあの日から数日。ついに、ついに帰ってきた我が相棒。もう回転が気持ち良いー。これだね、これ。

「遊姫、そろそろ止まったら？」

ぐるぐるぐるぐるーッピタ。

いっぱい回転したぜー。ありがとねー、桐谷（きりや）魅子（みこ）ちゃん。君は命の恩人だー。だから、お菓子あげちゃうよー。

「相変わらずその椅子にこだわるなー。ウチの店に来て何時間も吟味しただけあるな」

「魅子ちゃん、ありがとなー。持つべきものは頼れる親友かー。いやいやー、懐かしいな」

「ハイになって回想始めるなよ」

なってないなってない。あはは、フワフワモフモフ気持ち良いー。あはははは……そろそろ落ち着こうか、私。

とりあえず、魅子ちゃんとお話しましょっかー。

「最近どうだい魅子ちゃん？」

「いきなりだな。まぁ、普通かな？いや、遊姫の椅子がグシャグシャの状態で運び込まれた時は泣きそうになった。私が丹精込めて改良したのに」

それは悪いねー、真耶ちゃんが。まぁ、直ってくれて良かったよ。

「そーいや、いるんだよなー」

いきなりだな、どしたよ魅子ちゃん？

「ＩＳを動かせる男だよ」

あぁ、一夏くんと如月くんかなー。

「私達の頃には居なかったからねー、そういうの」

「だな。代わりに化け物クラスの代表候補生がいたがな」

いたのか化け物？マジかー、見てみたかったなー。

「ちなみに遊姫、アンタだぞ」

はい？ははは…気のせいだよ、気のせい。確かに代表候補生だったけど、そんな危険極まりない化け物ではなかったよー。

「あのとんでもＩＳ使えたからなー。挙げ句に体当たりでフランスの代表候補生を倒したからな。おかげで、あの代表候補生……名前は何だったかな。まぁ、良いか。アイツ、代表候補生からおろされたからなー。ケケケ、ザマァねえな」

嬉しそうだね、魅子ちゃん。エミリアちゃんだよ、そのフランスさん。あの娘、その後、君にも負けたよね？確か……噛ませ犬って言う渾名がつけられたよね。まぁ、仕方ないよね。訓練もせずに取り巻き連れて威張っていただけだからねー。ところで魅子ちゃん、仕事はいいの？

魅子ちゃんが帰りましたので、しばらくまったりタイムでーす。机の引き出しからポータブルテレビとお菓子を出してのんきしますよー。

……噛ませ犬

……わん。

犬かー。可愛くてもふもふでぽかぽかそうだなー。
良い天気だね。散歩日和で良いね。でも私は現代っ子だから室内を歩きます。今は歩かないけどー。今日は1日相棒に座っていたいです。だーれも来ないな平和だなー。怪我人いなくてハッピーだー。
そして放課後になりました。珍しく簪ちゃんが寝に来なかったなー。昨日はちゃんと寝たんだね、お姉さんうれしーなー。
うし、暇だからボーッとしてようかなー。
とかなんとか悩んでいると、保健室の扉が開くじゃない。

## みんな帰りなさーい

……あー、うん、だから……えーっと、何なん？
保健室に運び込まれたセシリアちゃんと鈴音ちゃんが何故か私を睨みつけてくるよ。何？風撫で引きずりまわしてほしいの？

「で、どうしたよ、お二人さん」

とりあえず、聞いてみましょうかねー。どしたんだい、その怪我。わんぱくしたのかなー。

「ラウラ・ボーデヴィッヒがやり過ぎたんだ」

如月くんが説明してくれる。なるほどー、ラウラちゃんがわんぱくしたのか。仕方ないよね、軍人さんだから。まぁ、仕事でもしますか。

「とりあえず君等は次のトーナメントには不参加だね。はい、ざんねん」

「ちょっと、保健の先生ならなんとかしなさいよ」

鈴音ちゃん、無理だよ。私にそんなやる気はないから。

「まぁ、一夏くん、シャルルくん、如月くん、ご苦労様。この娘達はこっちで面倒見るよ。だから安心しなさいな」

胸を軽く叩いてえっへん。がんばりますよー。
どーしたの一夏くん。顔を赤くして？風邪か？照れか？わからない

なー。

「月村先生、わたくし達に何かアドバイスをくださいませんか？」

アドバイス？いやいや、そーんなことを言われてもねー。基本的なことしか言えないよ。

「早寝早起き返事はハイ」

「何のアドバイスですの！？」

何のって……日常のだよ、セシリアちゃん。

「わたくしが聞きたいのはラウラ・ボーデヴィッヒに勝つためのアドバイスですわ」

なーるほど、難しいな。うーん、無いかな。だって私は戦わないし、先生だから贔屓しないし。あっ、でも怪我人の味方ですねー。でも、怪我人を戦いに駆り立てたりもしないよー。親御さんに怒られちゃうから。

「ところでシャルルくん」

「何ですか、月村先生？」

「女の子ちゃんかな？」

「え！？」

うん、何か不味いことでも言ったかな、私は？

「な、な、なんのことですか！？」

自分の胸に手を当ててみなさいなー。シャルルくん、不審すぎるよ。絶対なんかあるでしょ。一夏くんも何か慌ててるし。如月くんは鋭い目で見てくるし。

「いや、動きや言動に女の子っぽさが感じられるからさー。性同一性障害か何かかなーなんて思いました」

見た目も女の子が男装したようにしか見えないし。もしかして……宝塚狙い。それとも真逆の女形でも目指してる？

……廊下が騒がしいなー。なーんて思いこんでいると扉が開き、大量の生徒が雪崩れ込んでくる。ひゃー、みんな怪我人ですかー。手が足りないよー。

「織斑くん、私と組んで」

「私と出て、デュノアくん」

「如月くん、おねがーい」

女子達は元気だねー。……怪我人が居るんだけどなー。キャアキャアキャアキャア疲れない？私は疲れていますよ。……本当だよ、嘘じゃないよ。まぁ、みんなが怪我してなくて良かったよ。

一夏くん達は大変だね。私は関係ないから構わないけどー。ひとまず、相棒と仲良くやってますかー。

ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる。

「通してください、道を開けてください」

んー、真耶ちゃんの声だね。今日は来客タップリだー。

「凰さんとオルコットさんのＩＳはダメージレベルがＣなので参加出来ません」

なーんの話？……あぁ、タッグトーナメントの話。てか、そんなに損傷したんだ、セシリアちゃんと鈴音ちゃんのＩＳ。やり過ぎだよー、ラウラちゃん。……此処にはいないけどねー。どうでも良いけど、怪我人居るから帰ってくれないかな。いい加減迷惑になっちゃうよ。

「ほら、みんな出ていって」

頑張ってみんなを追い出す。何故か真耶ちゃんだけ残ったけどさー。君も帰りなさいよ。

「うぅ、頭撫でてくれなきゃ帰れません」

真耶ちゃん……最近面倒なんて言われない？まぁ、撫でますけど。なでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでー…ペシッ。

「痛いです、遊姫さん」

気にしない、気にしない。真耶ちゃんの頭が正常に戻りますよーに。

## 好きなら好きって言わないとねー、はい無責任

さーて、心を何に例えようか。……心を例えることは難しいよねー。やっぱりさ、ストレートに伝えないと無用な勘違いを生むから。と、言うわけで……私を解放しなさーい！！なーんで両腕を掴まれているのさ。なーんか悪い事をしたのかな？だとしたら謝るから、頭なでなでしますから。……だからさ、止めようよ、千冬先輩に真耶ちゃん。今気づいたけれどね、千冬先輩って呼び方だと距離感を感じるねー。でも、気にしないし、言わない。だって、千冬先輩にそのこと言ったら、とんでもないめにあいそうだから。言葉にしなきゃ伝わらないなーんて言うけど、無責任だよね。どーすんのよ、それが原因で酷い事になったら。

「だから千冬先輩、やめてほしーなー」

「だからの意味が分からないが止めない。私には遊姫が必要だ」

確かに、だからについて言ってませんでしたね。でも理由言っても止めてくれませんよねー。

「トーナメントでは何があるか分からないからな。怪我人が出ても良いようにな。……遊姫を愛でたいからな」

「遊姫さんが居ないと何かあった時に大変ですから。……頭撫でて抱き締めてほしいです」

2人とも、正論言ってるけど後半の欲望がだだもれですねー。一夏くんみたいな鈍感主人公くんなら聞こえない用になってるかもしれないけど、私は聞こえちゃってまーす。指摘はしないけどね。

ところでなーんと、今日はタッグトーナメントの日なんです。わー

パチパチ……うん、それだけ。実は戦いはもう始まっているのだよ。一夏くん、シャルルくんペアとラウラちゃん、如月くんペアの戦いが。見なよ、醜い争いだろ。同じ人間なんだぜ……アレで。とりあえず頑張れー。……あれ？気のせいか、ラウラちゃん、1人で戦ってないかなー？なにしてんの如月くん。……おぉ、分かっちゃった。アレだね、好きな娘に意地悪するって言う例の奴ですか！？もーう、如月くんも素直じゃないなー。箒ちゃんと同じでヤバイよ。素直にズバッといかなくちゃ。命短し恋せよ乙女だっけ？つまりは当たって砕けろですね、分かりませんが。恋だねー。微笑ましいなー……頭撫でてあげたいなー、ラウラちゃんの。如月くん？イタくなくなったらね。

停止結界だっけ？見破られてるね。第3世代も一概に良いとは言えないね。タイマンなら強いのに、ラウラちゃんは頑なに1人で戦おうとするし、如月くんは好きだからって援護しない意地悪するし、はは、バカなのかなー。仮にもラウラちゃんは軍人でしょ。ワンマンは軍人として駄目駄目ちゃんだよ。見なよ一夏くん達。男の友情パワーで頑張ってるよ。あぁ、ラウラちゃんに良いのが入ったね。

## まさかラウラちゃんが第二形態を持っているとは

はてはてさてさて、一体どういう事になったんだろうかねー？みんなが慌ただしいね。千冬先輩が周りに指示を出している。一夏くんに退避するように指示をしてるんだけど、一夏くんが駄々こねちゃってー。大変だーね。私はのんきに見学中。すごいなラウラちゃん、変身して千冬先輩みたいになったよー。一夏くんがキレてるねー。そんなことは気にせず、私はのんびりやってますー。保健の先生だからねー、戦いませんよ。怪我なんかしたくないしね。おぉ、如月くんがラウラちゃんに向かっていったー。はい頑張れ、それ頑張れ。

「遊姫、早くＩＳを展開しろ！！」

千冬先輩……さっき一夏くんに好きにやれって言ってましたよねー。やっぱり、弟くんが大事なんだね。だからって、私に行けって言うのはねー、やだなー。また身体の節々がガタガタになるんでしょー。それにほら、一夏くんがラウラちゃんと斬りあってるよ。部分展開だけだけどね。如月くんがラウラちゃんにビームを撃つせいで、一夏くんが上手くラウラちゃんと戦えてない。ラウラちゃんが回避行動するから一夏くんが追えてないねー。

「あの馬鹿！！」

お怒りですね、千冬先輩。……でも左手は私の頭の上にありますよ。んー、このままじゃ怪我で終わらないよねー。しかーし、私には祈ることしかできませーん。だから、お二人さん、頑張ってねー。

「それにしても良かったですね、遊姫さんのデータじゃなくて」

「確かにな。もし、遊姫のデータなら私は手加減出来ないな……遊姫を勝手に使ったからな」

真耶ちゃんが言いたい事はそこじゃないよー。私のデータなら高速戦闘だからラウラちゃんがもたないって事ですよー。

「まぁ、千冬先輩でも十分辛いとおもいますよー」

一応言わなきゃねー。

「そう思うなら行ってこい、遊姫。私を倒して良いのはオマエか一夏だけだ」

いやいや、誰でも良いでしょー。私は千冬先輩を背負うのは無理だから他の人に頼みます。とりあえず一夏くんかなー。

とかなんとか思っていると、一夏くんがピンチですなー。きゃー、一夏くん。……今のは無し、恥ずかしいにゃー。

てか、如月くんはなーにしてんの？あぁ、ラウラちゃんに軽くあしらわれているんですかなー。ほらほら真面目にやってやりなさい。囚われのラウラちゃんを救いなさいなー。

「そろそろやれ、遊姫」

……しっかたがないなー。

「……変身」

## 弱い者と強い者（前書き）

警告！！真面目にやらせてもらいます。

## 弱い者と強い者

アリーナに入った時に目に映るのは追い詰められた一夏くんと追い詰める千冬先輩を模したラウラちゃん。私がする事は１つ、一夏くんの救出。

風撫の追加装甲『鎧』をパージして高速で向かう。ラウラちゃんがブレードを振り上げて、一夏くんにトドメをさそうとするが、私の方が速いね。一夏くんを後ろから抱き締めて、身体を回転させる。同時にラウラちゃんに蹴りを放ち、ブレードに当てて動きを止めると、一気にその場から離れる。

「放してくれ、遊姫さん！！オレが、オレが」

暴れる一夏くんを地面に降ろすと刀改を握り締め、一夏くんのシールドエネルギーにダメージを与える。ＩＳが使える状態のままにしておくと危ないからね。ここで黙って見学な。

「まぁ、先生に任せなさいな。確かにアレは千冬先輩を模しただけの紛い物だけど、強いのは事実だね。逆に君は思いは本物だけど、アレに勝てるほど強くはないよ」

「確かにオレは弱いけど、アレを許す訳にはいかないんだ！！」

姉想いだね、一夏くん。でも、それだけじゃね。

「見なよ、如月くんを」

ラウラちゃんと戦う如月くんを指差す。ドラグーンで多方向から攻撃を仕掛けているが、千冬先輩のデータの前では無力。だからとい

って、近接戦闘をかければあっと言う間にやられるだろうね。世の中、データだから弱いなんて法則は無いからね。甘く見れば瞬殺されるよ。

「彼も弱い。だけど気づいていないよ。強いと思い込んでいる。今の君はあんなのと同じさ。口で弱いと言ってるが、何処かで上手くいくなーんて思ってないかい？」

「そんなことは…」

「無いとは一概に言えないでしょ」

一夏くんの顔が恐い事になってるね。仕方ない、自分ではアレを倒せないと面と向かって言われているからなー。

「まぁ、別に認めろなんて言わないよ。認めたから偉いって事は無いからね。ただ、当たり前の様に強いと思うのは止めた方が良いね」

私より背が高い一夏くんの頭に手を置いて撫でる。

「アレは私がなんとかするよ。一夏くんは見てるだけで良い。見て何か見つけなよ。見つからないかも知れないけど、とりあえず見てな」

頭を撫で続ける。一夏くんは少しだけ納得のいかない顔をしていた。ちょっと可愛いなー。

「じゃあ……頑張りますか」

一夏くんに背を向け、飛び上がる。

ＩＳスーツ無しでどれくらい無理が出来るかな？相手はデータとはいえ、千冬先輩だからね。全力でいかなきゃな。
両手に刀改を構えて、如月くんに近づく。如月は私が来たことに少々驚いているみたいだから、一夏くん達がいる地点に蹴り飛ばす。有無は言わせない。半端者は邪魔になるから。

「はてはてさてさて、勝負しましょうかラウラちゃん」

狙いを如月くんから私へと切り替えたラウラちゃんがブレードを構える。
始めに動いたのは私。引継で上空高く上がり、ラウラちゃんの方へ急降下する。左手の刀改をラウラちゃんに向けて振りおろす。ラウラちゃんがブレードで防ぐが、引継のスピードを乗せた刀改の力を完全に受け止められる訳は無く、私に押されていた。
私が両手の刀改を振り回し、ラウラちゃんはブレードで全てを防ぐ。はっきり言って、剣の腕は千冬先輩の方に軍配があがっている。私の最大は剣じゃなくて、速さだからね。剣で負ける位、どってことない。
一度距離を置き、また上昇する。

「聞こえてるかどうかは知らないけど、強いねラウラちゃん」

クルリと縦回転。引継と後押のスピードを加えて、ラウラちゃんへとまた急降下。右足をつきだして踵落としを繰り出す。私の右足の刃身とラウラちゃんのブレードがぶつかる。踏ん張るラウラちゃんのブレード。私は左足を振り上げ、ブレードを上下から刃身を打ち付けて破壊する。するとラウラちゃんが動きを停止する。

「剣が破壊された時のデータは無いんだね」

ラウラちゃんの頭に右腕の後押で加速させた拳を放つ。装甲が剥がれ、ラウラちゃんの顔が露出する。直ぐ様ラウラちゃんを引っ張り出して保護すると、残ったＩＳを刃身の蹴りで縦で真っ二つにする。

「お休みラウラちゃん」

ラウラちゃんの頭を撫でる。

## 私も怪我人だから、痛いからー（前書き）

何を書いたのかなー？

## 私も怪我人だから、痛いからー

みんな、保健室って知ってる？怪我したらくるところなんですよ。今いる怪我人は３人。一夏くんに如月くん、気絶中のラウラちゃん。ちなみに私も怪我人かも知れない。身体の節々に激痛が。今は相棒に背を預けているから、なんとかなってるね。立ったらしゅーりょーですから。

「なんで手を出したんだ、月村先生」

明らかに怒った顔で私に問いかけてくる如月くん。理由を言わなきゃー……駄目？

「あのまま戦ってたら勝てたんだ」

凄い自信だねー、如月くん。その自信はどこで製造したのかなー。どうでも良いけど左を見なよ。一夏くん、君と違う顔してるよ。

「まぁ、勝てたかどうかは兎も角、生徒に怪我を負わせる訳にはねー」

少し困るなー。ストレートに言ったら怒るでしょ。

「それに、ラウラちゃんを無傷で助けられたの？」

「出来る！！」

……馬鹿なのかなー、この子は。

「１００パーセント出来ると言えるの？」

「そうじゃなきゃ言わない」

……はぁ、うん、手遅れと言わざるをえない。１００パーセント出来るなんて夢物語を語る時点で。私はラウラちゃんに傷を負わせる覚悟で挑んだのに、君は犠牲無くやると言い切る。そうだねー、舐めてるなー。

「そっか、なら悪い事しちゃったね。君の覚悟を無駄にしてしまったねー」

謝る様に手を合わせる。ううー、軽く動かすだけで痛い。涙がでそうですよ。

「！？まぁ、俺も言い過ぎました。すいません、失礼します」

如月くんは何か納得したような顔で出ていった。気のせいか、にやけてた？

「で、一夏くんも何か不満があるのかな？」

私を一心に見つめてくる一夏くん。こういうのを目で犯すって言うのかな？……真面目に見つめてくる一夏くんに失礼だねー。

「遊姫先生……オレは弱いのか？」

ふーん、無力感から来た言葉かな？

「弱いよ、間違いなく」

直球投げます。言葉を濁して無用な勘違いをされたら、互いにまずいから。

「君はこのＩＳ学園の生徒達の中で、一番不利な始まりだったよ。それでも、代表候補生と戦える様になった。君を支えてきたのは、ＩＳの性能と心だと思うよ。セシリアちゃんの時はＩＳに鈴音ちゃんの時は、心かな？イグニッションブーストに踏み切った心。でも、君は一度も勝ちを得たことは無いよね。一度目は負け、二度目はうやむや、今回のラウラちゃんとの戦いはタッグで君１人の実力じゃない。……とまぁ、そこはどーでも良いよ」

「どーでも良いんですか」

おうよ、気にすんなー。

「まぁ、今回はただの力不足だよ。君はまだまだ弱いよ。別に弱いのが悪いなーんて言わないけどね。私に邪魔されたくなかったら、強くなれば良いよ。ただがむしゃらにさ。マンガやアニメみたいに上手くはいかないんだから」

ははは、無責任かな。強くなれって。

ガシッ！！

……！！

「遊姫先生、オレ…強くなる。強くなって、遊姫先生や千冬ねぇを安心させたい」

うんうん！！分かったから手を握らないでー！！激痛が激痛がー！！

## お休み……私（前書き）

寝てましたよ。やらかしましたよ。何を書いたか自分でも分かってないよ。でも投稿。

## お休み……私

私に身体的にダメージを与えた後、一夏くんは退室していった。やり逃げですか、一夏くん。なーんて思っていると、ラウラちゃんが目覚めたようねー。

我が相棒、キャスター付きの椅子でラウラちゃんの方へ向かう。足では行けないよ、痛いからね。

「おはよう、ラウラちゃん。気分はどうかな？」

「……何故」

ん、どうしたのさ。

「何故キサマは強い」

……流行ってるのかな、強い弱いが。まったく、難しい様な楽な様な事を。

「何故強いか？うーん、なんでだろうね。逆に質問。君はなんで弱いの？」

「……分からない」

弱々しく返事をしてくる。良かったよ、言葉のキャッチボールが出来て。

「でしょ。今の質問は難しいものなんだよ。まぁ、アレがこうだから強いって言い方が出来るけどさー。私が強いのは事実だよね。別

に最強じゃ無いよね。ただ、君よりは強いのよ」

「キサマより私は弱いのか」

「弱いよ。でもさ、認められるのは良いよね。弱いのが恥だとか言わないよ。弱くても良いんだから。問題はその事を認めないってことなんだよねー」

痛む腕をラウラちゃんの頭へと伸ばして、撫でる。あーうー、痛いけど気持ち良いよね。

「強くなりたいなら強くなれば良いよ。でも、最初はみーんな弱い。ラウラちゃんが強くなりたいなら、まずは周りを見てみましょう。色んな人がいるから。誰もが違うモノを見ているから」

なでなで、なでなで、なでなで。

「何の為に力を欲するから考えなくても良いよ。無いから力を求めてはいけないルールはないから」

なでなで、なでなで。

「ラウラちゃんが何をしたいかは自由だからね。誰かが強要する権利はないから。」

なでなで。

「困ったら私を頼っても良いよ。保健室か何処かにいるから。だから、ひとまず頼らせてー」

疲れが限界まできたので、ラウラちゃんに抱きついて寝させてもらいます。お休みー。

## 寝ても起きても変わらない

うーん……朝？

……何か暖かいなー。

……昨日……保健室で寝ちゃったんだっけ。うわー、着替えずに寝たのかなー？……起きよー。

パチリっと目を開けると、目の前に銀色が見える。……サプラーイズ、夢かな？

もう1回寝て起きれば居なくなっていてくれたら良いなー。……無理だよね。

私はラウラちゃんと寝てますね、完全に。まずはゆっくりベッドから降りて、保健室の扉に鍵をかける。次にカーテンで窓から覗けないようにする。見られたら問題だよね、この事態。鍵かけてなんだけど、お風呂に行こうかなー。

さっぱりん♪

保健室に戻って来ました。どうやらお風呂にはいっても現実は変わらないみたいですねー。ははは……ラウラちゃんが起きてる。

まぁ、気にせず相棒のキャスター付きの椅子にすわりまーす。はてはてさてさて、一体何ぞや。

「おはようございます、姉様」

「はい、おはよー」

気のせいかな？不吉な言葉が聞こえた。最近色々あったからなー。きっと疲れてるんだよ。だって、昨日は風撫使って無理したからなー。やっぱりＩＳスーツ着ないと駄目だね。うん、今度からは気をつけよう。

「いきなりだけど、姉様ってなにかなー？」

「姉様は姉様です」

姉様は姉様かー、なるほど、意味が分からないなー。

「私が寝た後、何があったの？」

別のキャスター付きの椅子に座らせたラウラちゃんが私を見つめてますねー。

「姉様が寝むった後、教官が来ました」

教官？千冬先輩かな、が来てどしたのよ。

「私にラウラ・ボーデヴィッヒとして生きろと。後は……言えません」

千冬先輩はラウラちゃんに何を吹き込んだの？

「日本では、憧れや愛する同性の人を姉様と呼ぶと聞きました」

うん、それはお姉様って奴だね。すごいね、ドイツ。

「私を助けてくれたのは姉様です。強くて優しくて暖かいです」

……あぁ、そう。

「んー、まぁ、呼び方は任せるよ。とりあえずお風呂はいって授業の準備でもしてきなさいな」

ラウラちゃんにお風呂に入るように言う。まだまだ朝早いから今の内にはいってきなさーい。

「分かりました姉様。昼にまた来ます」

そう言って、嬉しそうに出ていくラウラちゃん。道中転ばないでねー。昼に来るならお弁当でも作っておこうかなー。

**ドイツもコイツもなんなのさー！！**

たらららららーん、お弁当を2つ作りましたから気分はランラン。でもガックリする事態なのですよ。保健室の扉の前に真耶ちゃんがいる。何か目が虚ろでなーんか恐い。

「やー、真耶ちゃん。どしたんだね、こんなところで」

片手を挙げてご挨拶。両手にお弁当を持ってます。あまり激しい動きができないでーす。する気もないけどさー。

「遊姫さーん！！」

なーにー、真耶ちゃん……って、抱きつくでないでありまするなー！？

「私ももう駄目ですー！！」

にゃー、胸に顔を埋めるなー！！私ももうって何だー！？あと誰が駄目なのー？

とりあえず真耶ちゃんと共に保健室に入る。そして話を聞く。第3回そしたら分かるお悩み相談会開催ですなー。1回目は一夏くんので2回目はラウラちゃん。私はカウンセラーじゃないぜー。まぁ、聞きますよ真耶ちゃん。

「実はシャルルくんはシャルロットさんだったんですよ」

「……それで？」

色々話しましたよー。そしたらお弁当1つ持っていかれましたよー。
ははは、作り直しだよね。

なんだろなー？さっきとは違う人が保健室の扉の前にいますねー。
なーにしてんですか、千冬先輩。

「遊姫、その弁当は何だ？」

挨拶よりお弁当ですか千冬先輩。

「えっとー、ラウラちゃんと一緒にお昼をと思いまして」

「そうか、私の為にわざわざすまんな」

お気になさらないでください千冬先輩。貴女の為に作ってはいませんから。とかなんとか思っている間にお弁当を盗られました。

「ボーデヴィッヒの物は私の物だ」

走って逃げる千冬先輩に見送る私。いくら昔上官だからといってもそれは窃盗なんですけどー！！

はてはてさてさて、今度は誰も居ないよね？……居ないですね。なら安心ですね、保健室にゴールですよー。

「月村先生だー」

扉の前じゃなくて扉の向こうに居ましたか、みうっち。
これ以上お弁当を作る気はないので、すぐにデスクにしまって相棒のキャスター付きの椅子に座る。

「みうっち、怪我？」

そうじゃないなら帰ってねー。

「怪我でーす」

膝を擦りむいたのだねみうっち。ならならすぐに手当てをしましょうかー。
パパパッと治療してみうっちに保健室利用カードを渡してさよーならー。いやいや、みうっちを疑ったよねー。

「月村先生」

またまた来客で簪ちゃん。来客が多いなー。……何かクンクンにおいを嗅いでいるね。消毒液のにおいかなー。

「いいにおい」

……消毒液のにおいが好きなのかなー、簪ちゃん。

「先生…お弁当つくったの？」

……凄すぎだよ、簪ちゃん。
この後、簪ちゃんの物欲しそうな顔に負けて、お弁当を渡してしまったのよー。嬉しそうな顔で帰っていきましたね。寝に来たはずだよねー。けして、お弁当が欲しかった訳じゃないよねー。ははは、

お昼まで時間が無いじゃない。
ダッシュでお弁当作りに行きました。

**不在だね、煙いから**

いきなりですが、血の繋がらない妹がいます。国籍が違います。軍属で常識が欠如しています。

「大丈夫ですか、姉様？」

「大丈夫だよ、ラウラちゃん」

私よりも低い頭を撫でる撫でちゃう。いやいや、撫で心地がいーねー。今日は外出してますよー、ラウラちゃんと。理由は簡単、暇だから……嘘ですよー。今度、臨海学校的なものがあるんだってさー。つまりは水着を買いに来たのよ。なーに着るの？って聞いたら、姉様が選んでくださいだってー。いやーん、責任重大で大変だにゃー。と言うわけで、レゾナンスの水着売り場に来ました。気のせいかな？女性ものの水着コーナーに男がいるよー。白い目で見ればいいのかなー？

「ラウラちゃん、コレを着てみまショータイム」

手近な水着をラウラちゃんに渡す。……てきとーにはやってませんよ。適当にやってますねー。

「どうですか、姉様」

着替えたラウラちゃんは少し恥ずかしそうですねー。まぁ、可愛いから心配しなくてよろしーよ。

「決まりだね、買ってあげるねー」

私服に着替え終わったラウラちゃんから水着を受け取り、レジに持っていく。

「姉様、わ、私が払います！！」

慌てるラウラちゃんが腰にしがみついてくる。……わざとかなー？

「妹さんですか？」

店員さんが私に問いかける。ヤバイな、はいと言えばラウラちゃんが勘違いをするし、いいえと言えば店員さんがＧＬ的な誤解をするなー。

「はい」

笑顔で受け答えをしてやりますよー。ＧＬ的誤解は不味いから。なーんかラウラちゃんが嬉しそうにしているから諦めます。

ラウラちゃんと手を繋いで帰ろうとした時に、真耶ちゃんと千冬先輩が一夏くんとシャルルくん改めシャルロットちゃんに絡んでいるのが見えるけど気にしません。私には見えてませんから。

「姉様、少し行ってきます」

ラウラちゃんが死地へと向かって行っちゃいました。物好きだねー。私は気にせず行きますからねー。

「先に帰ってますからねー」

レゾナンスを出て人混みに紛れて歩く。忍び、そして討つ。しないよ、犯罪になるからねー。
なーんて思っていると、完全に囲まれました、３人組みに。

「いい女じゃないか。面貸しな」

「久し振り、ニキちゃん。相変わらずですなー」

私を囲んだのは知り合い達でしたー。わーパチパチ。ニキちゃんに香美奈ちゃんに魅子ちゃんが揃ってるねー。葉子ちゃんは仕事かなー？葉子ちゃんは煙大好きな煙い娘だから、煙草の煙ある職場ならどこでも良いって言ってたなー。
気づいたらニキちゃんと香美奈ちゃん（自称は神奈）に捕まっていた。

「魅子ちゃん、ヘルプ」

「アレだ、頑張れ」

２人に腕を引っ張られながら、私はドナドナを歌わなかった。迷惑になるし、詳しい歌詞を知らないからー。

## 脱線種　ハイネとは違うんですよ、ハイネとは！！（前書き）

知ってる人は知っている。出来は悪いけど。

**脱線種　ハイネとは違うんですよ、ハイネとは！！**

ハイネ・ヴェステンフルスが死にました。あーっらら、やられちゃいましたか。確かにザクとは違いましたね。エースで最新鋭の機体なのにいの一番にやられちゃうんだもん。ザクとは違うねー、ザクとは。ちなみに私は生きてます。元気ハツラツではないですけどねー。ははは、議長の命令である部隊と一緒に出撃していますよ。なーんとグフイグナイテッドに乗ってます。スピード強化型のカスタム機で深緑色ですねー。

実は私……赤服のエースです。

犬の散歩がてらに地球軍の陸上戦艦ポナパルトを襲撃中です。

「ガツムラ、あの戦艦を逃すな！！」

隊長からの命令ですね。任せて隊長。合点承知ですよ。とは言ったけどねー、３機のGタイプが強くて仲間が苦戦している。

「青いのでも落としますか」

戦艦の上にいるヴェルデバスターと空中のストライクノワールは放っておいて、ブルデュエルに狙いを定める。

「やっちゃってくださいな」

私の通信を聴いた、ケルベロスバクゥハウンド４機がブルデュエルに向かっていく。バクゥにスティレットを投げつけてくるから、私がスレイヤーウイップで弾く。バクゥの機動でブルデュエルを翻弄している間に、ビームソード『テンペスト』を構えて突っ込む。私に気づいたブルデュエルがビームサーベルを構える前に右の手足を

切り裂き、胴体に蹴りをいれて仰向けに倒す。

「悪いけど、倫理も何も期待しないでね」

テンペストの切っ先をブルデュエルのコクピットに突き立てる。何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も。

仲間がやられたのに気づいたストライクノワールが接近してくるから撤退する。欲張って残りの2体を倒そうなんて思わないからねー。

とかなんとか思っていると、バクゥが酷い目にあっていた。とりあえず撤退します、残存戦力を連れて。

## 過去編　私のは取り巻きじゃない（前書き）

ほんとは違うの書いたのに手違いで消えました。……ははは、やっちゃいましたよ。だから急いで『別』の話を書きました。再生すれば良かったかも。長々失礼。では、話は関係ないけどどうぞ。

## 過去編　私のは取り巻きじゃない

「やあ、程度の低い3組諸君」

エミリア・カランティーナさんがババンと登場。だけど、興味がないからまた今度ねー。

私は魅子ちゃん、葉子ちゃん、ニキちゃんとのんきにエミリアさんの脇を通り抜けます。廊下の真ん中で邪魔だよねー。もっと周りを気遣っていきましょう。注意を口にすると大変だから言わないよ。口は災いの元なんて諺があるからねー。

「待ちなさい！！」

ガシッと肩を掴まれる。

「わざわざ私が声をかけてあげたのになんて態度だね、君は」

うわー、自己主張が凄いねエミリアさん。ニキちゃんが睨んでるよ。

「迷惑だぞ、フランス」

私の肩を掴む手をはらうニキちゃん。おぉ、ありがとねー。
後ろ向いたままで話をするのはマナーが悪いからクルリと回転してエミリアさんと向き合う。相変わらず取り巻きさんが居るね。私の周りに魅子ちゃん、葉子ちゃん、ニキちゃん。……見ようによっては私も取り巻き連れているように見えるかもねー。別に取り巻きだとは思ってないからねー。

「何の用でしょうか、カランティーナさん」

私が口を開く前に葉子ちゃんに言われちゃった。ニコニコしてるんだけど、ライターをカチカチやってんね。何？燃やすの？止めとけば葉子ちゃん。人間の焼けた臭いはとんでもないらしいから。

「カランティーナ、いちいち絡むな迷惑だから」

厳しいね、魅子ちゃん。表情も死んでる。本当に迷惑だから良く分かるよ。

「まあまあ、何用かなエミリアさん」

「何の用？決まっているだろう。今度の学年別トーナメントで君を倒すからね。君が五体満足の内に挨拶だよ」

……ご苦労様ですねー。で、何の用かなー？

「お気遣いどうもですー。それじゃあまた今度」

「まだ私の話は終わってはいない。君と私が戦えば結果が見えている」

結果なんて誰にも見えないから意地張るなよー。

「だから言っておきたいのだよ。君が負けたら、君と君のクラスメイトに土下座をして宣言してもらいたい。私たちはエミリア様に逆らいませんと、下僕になりますとな」

ははは、ふざけたこと言う前に医者いけよー。

「君が此処で私のものになるならクラスは免除してあげよう」

ゾワ！？

私の頬に手を当ててきやがりましたねー。とか思ってると左右から腕がズバッと伸びて、エミリアさんの手を掴んで私から離す。そして私はニキちゃんと葉子ちゃんに抱き寄せられていた。

「汚い手で私等の遊姫に触れんなよ。折るぞ！！」

「ふふふ、おいたする手は焼いちゃいますよ」

2人して物騒だねー。

## 過去編　この後、西島製鉄所に苦情を言います

ズンズンズンズンズカズン。……いえーい！！って感じで踊ってるねー、ニキちゃん。私は憂鬱なんですよー。ＩＳ学園に入学してはや２年。まさか日本の代表候補の１人になるとは予想もつかない予想外って奴だねー。でさ、きちゃった……専用機。しかも学年別トーナメントの日に。

「遊姫ちゃん、急いで急いで急いで急いで」

「急かしても意味無いですよ、西島（さいとう）さん」

今、西島製鉄所の西島さんが持ってきたＩＳを私色に染め上げてるさいちゅー。ちなみに私のパーソナルカラーは深緑。

「いいかな、その機体の名前は打鉄改高速戦闘仕様実験機だ。長い名前は気にする必要無い。まだ改造もとい改良の余地ありだからな」

何故か嬉しそうに語る西島さん。葉子ちゃんが私のＩＳをペタペタ触ってるね。なんか笑みが恐い。

「ふふふ、遊姫さんのＩＳ♪」

聞かなかった事にしたいなー。……無理だよなー。

１人頑張る私にＩＳが設定終了と１次移行へ開始されましたー。うっし！！逃げれる。さあ、戦いだぜー。

「よっしゃー！！あのカランティーナのドクサレ女をしめてこい！！」

やけに力んでるねー、魅子ちゃん。
魅子ちゃん元気だなーって思ってるね、西島さんが「あ！！」って何かに気づいた様子。冷や汗をダラダラ流しているね。まさか……まさか何かやらかしたのかなー？

「大丈夫だ、気にするな」

無理です！！私、そんな楽観くんじゃ無いから。

「まぁ、行きますけど」

ピットから飛び立つ。……あれぇぇぇー――――っ！？

「え！？」

アリーナの中央に居たであろう何かを通り過ぎた。
なんとかアリーナのシールドバリアーに激突する前に止まれたー。
何！？今のスピード！？……ありのまま今起こったを話したいけど、心臓がバクバクいってるからまた今度言うよ。憶えていたらねー。

「き、来たか」

どうしてびびっているのかなエミリアさん。どうして私もびびっているのかな、エミリアさん？

「私にやられる準備は出来たかい？」

青と白に彩られたＩＳを纏ったエミリアさんが胸をはり、決めポーズをとる。

「さあ、試合開始だ！！」

手に持ったレイピアを構えて斬りかかるエミリアさんに私は横に回避する。物凄いスピードで横にぶっ飛ぶ。回避は成功したのにー。ブースターの出力がとんでもなくて振り回されてますー。

「ちょこまかと！！」

粒子変換で呼び出したライフルを連射してくるけど当たらないなー。

「反撃をしますか」

エミリアさんから離れて急停止。身体に負担がかかるけど、そんなこと言ってられない。粒子変換で私の武器を生成しまーす。……あれぇぇぇ！？武器が無いですよぉぉぉ！？西島さんの「あ！？」ってこのことかな！？

## 過去編　激突！！私とエミリアさん

うわわわわぁーん！！武器が無いとはこれいかにー。おもいっきり欠陥ＩＳじゃないですか、この打鉄改は。スピードは本物なんですけどねー。

「逃げるしか能がないようだな。所詮は３組と言ったところか」

キザッたらしい笑みを浮かべたエミリアさんがライフルを乱射してくるけど当たらないなー。スピードに振り回されているけど避けるモノは避けるのさ。段々スピードに慣れてきたから。それにしても私達を馬鹿にするなんてね。気にいらないねー。馬鹿にするなら西島製鉄所を馬鹿にしてあげよう。こんなＩＳを作ったんだからー。

「武器がなければどうしようもないか。どうだい、此処等で降伏するというのは？どうせ、君の腕前では私には勝てないのだから」

エミリアさん……カチーンとはこないけど、なーに言ってんのかなー？私は嫌々クラス代表だけど、責任は果たすと決めてるからね。ただ武器が無いから勝てないなんて決めつけるなー。

「エミリアさん」

「どうした？降参するか」

エミリアさんがライフルの銃口を下げて私を見た。

あーあ、警戒を怠ったね。本物の代表候補なんですかねー？

「私は日本人だから武器が無いと戦えないなんて言うフランスの考

えは理解できませんよー」

言葉を言い終わると急上昇を開始する。あっという間にエミリアさんの上をとれた。今度は急降下。狙いはエミリアさん。彼女がライフルを構える前に体当たりをかまして、共に地面に落ちる。

落下の衝撃音が響き渡り、砂煙が舞う。視界が晴れると私はエミリアさんの首を右手で掴み。ライフルを持つ右手を私の左手が掴む。エミリアさんを地面に押し付けたまま加速。

「キャァァァ！？」

地面に押し付けられたエミリアさんはライフルを取り落とした。地面に押し付けたエミリアさんを今度は急上昇して空中に連れて行き、放る。

「キャァ！？」

悲鳴をあげることしかしないエミリアさん。はっきり言って弱い。私は高速のまま大きく縦に回転してから、エミリアさんに突撃をする。頭の上で腕を交差させて衝突に備える。

「ハァ！！」

激突！！高速での体当たりはエミリアさんをアリーナを覆うシールドバリアーにぶつけた。

「勝者、月村遊姫！！」

アリーナにアナウンスが響き、3組から歓声と2組から悲鳴が聞こ

えてきた。
シールドバリアーの手前で急停止しようとしたら背部大型ブースターが爆発した。
にゃー――――――!?
私は見事に壁に激突したのだ。

**私は時々、先輩を警察に売り飛ばしたくなります（前書き）**

戻ります。

## 私は時々、先輩を警察に売り飛ばしたくなります

早朝あたりに目を覚ました私はいつものタンクトップとジーパンに着替える。脱いだ迷彩柄のパジャマを片付ける。
おはよう朝の皆様。さよなら夜の皆様。今日も今日とて頑張りますよー。まぁ、今日は楽な日ですよね。だって、1年生の皆様方は臨海学校があるからー。数日間は不在ですねー。いやいや、安全安心に頑張って欲しいですなー、1年生達には。私はまったりゆらゆらやらせていただきますよー。1日ぐるぐるぐるぐるしますー。
とかなんとか思っていると扉をノックする音が……朝早くからだーれ？私の部屋に何の用？
ガチャリと開ければ千冬先輩と真耶ちゃんが居ますねー。

「おはようございます」

先制パーンチ。

「ああ、おはよう」

「遊姫さん、おはようございます」

千冬先輩と真耶ちゃんがちゃんと挨拶を返してくれますね。とりあえず招き入れる。
部屋に入れると、何故か2人は私のベッドに腰をおろす。そして、何故か千冬先輩は私の枕を胸に抱く。真耶ちゃんは毛布を羽織る。
……なーにしてんの？警察でも呼ぶ？

「朝から何用ですかー？」

もう見なかった事にしちゃいますから用件をどーぞ。

「私達はこれから臨海学校でしばらく遊姫には会えなくなる」

「だから行く前に会いたくて」

まるで月単位で会えなくなるみたいな言い方だね。

「それで？」

私が続きを促す。まともな答えを期待してないからね。絶対何かあるでしょ？

「本来なら遊姫にも臨海学校に参加してもらいたかったのだがな」

無理だと思いますよ。私は保健室でお仕事ありますし、行きたくありませんし。

「他の先生方からも反対された」

ありがとう、教師陣。私は感動していますよ。

「月村先生はＩＳ学園のアイドルだから絶対に行かせないって言うんですよ。おかしいと思います」

確かにおかしいね。いつから私はアイドルになったんだよー。芸能活動はしていませんよー。

「だから、私達は遊姫をこの目に焼き付ける」

真面目な顔してなーんて事を言ってるんですか、千冬先輩。
立ち上がる千冬先輩を呆れながら見る。
千冬先輩が私の肩に左手をポンって置く。

「やはり、臨海学校に行くのだから保健の先生は必要だ」

はい？その話は教師陣との間で決まったはずでは？

私は彼女達が怪しげな笑みを浮かべているのに気がつかなかった。

……気がつかなかったら、こんな事は思いませんねー。

## 青に囲まれて……だから？（前書き）

二話投稿しました。

## 青に囲まれて……だから？

気分はブルーでブルで青で蒼な感じです。青ばっかりでございますー。視線の先には2つの青が見えますねー。空の青と海の青。私の気分と合わせてチームブルー。皆が浮かれるバスの中で私、月村遊姫は沈んでいますよー。

「遊姫、海が綺麗だぞ」

だから？海が綺麗なら私が許すとでも。だったらお門違いですなー、織斑先生。

「私が悪かったから機嫌をなおしてくれないか」

そうですねー、織斑先生が悪いんですよねー。お腹殴って気絶させてー、拐ってくれましたねー。悪くて当然ですよー。織斑先生は見たくないから、窓の外でも見てますよ。人の心より自然の方が綺麗ですから。

「ごめんなさい、遊姫さん。もうしませんから」

真耶ちゃん、謝るならはじめからやるなよ。風撫で海にダイブさせちゃうから。バナナボートみたいに何度も海面に叩きつけても良いよね。

まぁ、いいや。いつまでもズルズルズルズル引き摺っていたら……陰湿くんになっちゃうよね。ほどほどに愚痴ったら後はスッキリンと綺麗サッパリ忘れましょうか。

「真耶ちゃん、なでなでー」

真耶ちゃんの頭を撫でます。

なでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでー。

「あうぅー。気持ちいいですー」

真耶ちゃん幸せそうだね。そして千冬先輩は真耶ちゃんをギロリと睨んでいる。真耶ちゃん……気がつかないね。さよなら真耶ちゃん。これが私の復讐だ。………千冬先輩も撫でてあげます。

なでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでなでー。

「ふふふ」

千冬先輩が素敵な笑みを浮かべてますねー。

周りはガヤガヤ賑わっていますなー。誰が一夏くんの隣になるかと五月蝿かったけど、いつまでもにぎやかですね。

そろそろ目的地に着くんじゃないかなー。ワクワクドキドキ楽しいなー。

無事に到着しました。場所はなんと、花月荘……で良いよね？　皆様が大はしゃぎですなー。まぁ、１日目は遊び放題ですから無理もないですな。

千冬先輩の説明だか注意が終わり、皆がダッシュで解散。さぁ、海を満喫して来なさいな。

達に紛れて、男子が2名宿へと向かっていった。
……居たんだ、如月くん。

## まさかの視点、不愉快の一言＋知らない人達（前書き）

見なくても大丈夫。だってどーでも良いですから。ただなんとなくね。

## まさかの視点、不愉快の一言＋知らない人達

山崎太一（やまざきたいち）、俺の名前だ。日々、アニメやライトノベル、マンガなどを堪能しながら過ごしている。二次創作も読んでいる。
いつもの様に近所の通りを歩いていた時だった。とあるサイトのお気に入り小説が更新しているかどうかチェックしていると……ひかれた、車に。

気がつくと知らない場所にいた。
……まさか、よくある転生の場面じゃないか！？もしかして、転生チャンスの到来か！！にしても変わってるな。普通は白くて何も無い空間に神のジジイ、幼女神、女神のどれかが俺に謝ってる場面だろ。何で武家屋敷みたいな場所の中庭みたいな所にいるんだ？なんで雪なんか降ってんだ。演出か何かか？
まぁいい。神が来るまでどの話の世界に行くか考えなきゃな。
色々考えていると、目の前の屋敷の襖がスライドして、中から白色と淡い桜色と青色の美少女達が現れた。やべーな、すげぇ可愛い。

「はじめまして」

白髪の和服美少女が丁寧な挨拶をしてきた。
この様子だと、事故じゃなくて選ばれたみたいだな、俺は。

「貴方は何の因果かは分かりませんがこの世界に来てしまいました。ですので、すぐに元の世界に帰してあげましょう」

「おいおい、そりゃ無いぜ。俺を選んで連れてきたんだろ、美少女ちゃん」

「はい？」

俺みたいに二次創作を理解している奴じゃなきゃこんな待遇はえられんな。

「貴方はどうしたいの？」

青髪に青い巫女装束の全身青い美少女が俺に問いかけてくる。決まってんだろ。

「ＩＳの世界に転生したい。見た目はイケメンで名前ももっとカッコいいのを。時間軸的には一夏と同年代の頃で、ＩＳはストライクフリーダム。もちろん、戦闘経験も欲しいな。修行じゃなくて、頭に戦術が浮かぶような」

これで俺は最強だ。キラみたいな無双が出来て原作女の子達を俺の嫁にしてやれる。一夏みたいな鈍感馬鹿には勿体無い可愛い娘揃いだからな。

「……そう」

青い美少女が簡素に返事をすると俺の意識は遠退いていった。

「……何だったんですかね？」

私が白髪の少年昇月（しょうげつ）に問いかける。

「……さぁ？」

首を傾げる昇月……可愛いですね。思わず抱き締めてしまいます。

「対奈（ついな）、ＩＳって何ですか？」

全身青い対奈に問いかける。

「……知らない」

あれ？てっきり知っているものだと思いましたが。

「桜、そろそろ離れて」

抱き締めていた昇月から抗議があったので、名残惜しけど離しました。

今日も平和ですね。お昼ご飯は何にしましょうか？

## 装備無しで海は辛い

……海が青いなー。水着に着替えた女子生徒達に水着に着替えた男子2名が楽しそうに遊んでる。そんな中からラウラが私の方へ近づいてくるね。

「姉様、水着に着替えないのですか？」

着替えないよ、ラウラちゃん。と言うより、着替えられないよ。水着なんて持ってきてないから。元々は臨海学校には不参加だったから水着なんて買ってないのよー。幸いにも着替えはありましたがね。まぁ、現状はお預け状態ですなー。学生達はキャッハウフフですねー。

「水着が無いからラウラちゃんと一緒に遊べないんだよー。だからな、クラスのみんなと遊んできなさいな」

ラウラちゃんの頭を撫でて、送り出す。いってらっしゃーい。……寂しそうな顔で振り返らないの。軽く手を振ってあげるから。あらー、嬉しそうに去っていったなー。

ははは、私はのんきに砂浜で体育座り。目の前で遊んでいる女子達と一夏くん、如月くん。私は疲れているのだろうか？水着姿に混じって、着ぐるみみたいな姿の娘が居るんだけど。だーれだろう？感じ的にはのほほーんとしてるね。

「ほんわかほにゃほにゃ」

なーんとなく呟く。意味は無いですけど。1人砂浜でタンクトップとジーパン姿。失恋したのか、私は。ちなみに白衣は保健室で相棒

のキャスター付きの椅子とお留守番。
照りつける太陽が私をこがすー。ジュージュージュージュージュージューシーですな。暑くて熱くて大変です。海に入りたいけど入れない。こんなことなら水着を買っていれば良かったよー。

「遊姫さん、お待たせしました」

気がつくと目の前に真耶ちゃんが居ましたね。

「別に待ってないよ」

真耶ちゃんを待ってた訳じゃ無いからね。ただ、ボーッとしてただけだからね。なーんも無いからね。

「待ってないなんて……まるでデートみたいですね」

……疲れない？私は疲れたけど。真耶ちゃんのテンションについて行けませんし、行きません。

「真耶ちゃんも泳ぎに行けばどーですかな？」

「私は遊姫さんと一緒にいる方が良いです」

「海に来た意味が無いね」

「そんなことないですよ。雰囲気は大事ですー」

「……そう」

「そうです！！」

そんなに強く言わなくても。別に真耶ちゃんを批難している訳じゃないから。まぁ、真耶ちゃんだから良いや。にしても……暑いな。

「真耶ちゃん」

「何ですか？」

首を傾げる真耶ちゃん。

「海に行かない？」

せめて足だけでも海につけたい。だって海に来たんだもの。

## はい、あーん

パクっとひとくち。おいしーなー。流石は海の幸、絶品だねー。ちなみに今は夕食タイムでございます。広い場所でみんな正座でご飯食べています。別に正座じゃなくても……なーんてことは言えません。なんせ浴衣姿ですからね。座禅やあぐらは無理ですよ。まぁ、無理に足を崩したいならどーぞー。

「セシリアちゃん、無理せずテーブル席に行けばどーですかな？」

隣に居るセシリアちゃんに声をかける。もちろん、口の中身は処理した後だから、マナー違反にあらず。

「だ、大丈夫ですわ、月村先生」

だ、大丈夫ですか、セシリアちゃん。あからさまに足痺れているみたいですけど。あらー、バシッて叩きたいなー。

「せっかく一夏さんの隣になれたのですから……これくらい」

……大変ですねー。軽く足を崩せば良いのに。わざわざ正座で頑張るね。

「そういえば、遊姫さんはどうして教員席に居ないで此方なんですか」

そうそう、歳上には敬語が大事だぜ、一夏くん。親しき仲に礼儀有りって奴だね。

「私は今回非番扱いで来たので仕事している教員の中には混ざっちゃいけないの」

そんな訳は無いからね。ただ、教員達が恐いから逃げて来ました。

「本当にセシリアちゃん、大丈夫かなー？」

足の痺れで箸が進んでいないセシリアちゃんを見る。

「大丈夫ですわ、もう大丈夫ですわ」

そうかー、大丈夫ですわですかー。

……ぽん

「…ひゃ！？」

足に軽く手を当てただけなんだけどねー。とりあえず大丈夫じゃないんじゃない？悶えているセシリアちゃんの肩をポンポンと叩く。

「大丈夫かなー？」

「せ……先生のせいですわ」

「知ってる」

セシリアちゃんには悪いけど、私は自分のご飯を食べます。残すのは悪いからね。知らない人達に失礼ですので。はぅー、美味しいものですよー。

「セシリアちゃんも食べなさいな」

「そうだぞ、セシリア。こんなに美味いんだぜ」
私と一夏くんが攻撃しちゃいます。
「食べたいのですが、足が痺れてまして」
ふむー。どーしましょうか？仕方ないなー。
「はい、あーん」
セシリアちゃんの箸を使って食べさせてあげましょうか。
「心配なさらず、わたくしは自分で食べれます！！」
そうかい？ならば、秘策にでるしかあるまいて。
「一夏くん、あーん」
一夏くんに食べさせてあげましょう。何を驚いたのか、一夏くんは刺身を落としてしまいましたがね。顔が赤いぜ。高校生となると恥ずかしいかな、やっぱり。

## もう1名の男子……何処？（前書き）

白状します。原作を読んだことありません。だから、皆様が知ってることを前提です。キャラの説明なんてほぼ無かったのです。オリキャラも含めて。

とりあえずどうぞ。

## もう1名の男子……何処？

臨海学校は泊まりこみなので部屋割りがしてあります。いくら学生とは言え女子達ですから、大部屋でみんな一緒に眠りましょ、みたいな感じにはならないなー。まぁ、どーでもいい訳で。問題は男子2名をどーするかと言うことなんですよ。周りは昨今の肉食系女子の煽りを受けた強者？ばかりなので先生方も大変みたいですよ。先生方って言うか……千冬先輩と真耶ちゃんが。でも解決したみたいですよ。あと、もう1つ問題があるんだなー。拉致されて此処まで連れてこられた私はどーすんの？飛び込みだからねー。もちろん解決しましたよ。それはね、私と一夏くんが千冬先輩と一緒の部屋だってさー。でね、今は一夏くんに千冬先輩と部屋でまったりしますねー。ははは、今日は織斑姉弟と就寝になりますなー。

「遊姫、何をそわそわしている」

「気にしないでください。ねー、一夏くん」

「何でオレにふるんですか」

「異性2人にドキドキな一夏くんに愛の手をとねー」

「愛の手を…だと！？」

「何故に千冬先輩が反応？」

あと、言葉にしないけど一夏くんの顔が赤いなー。思春期の妄想かなー？千冬先輩は…何だろうね？ところで、男子2名の内の1名が此処に居るとして、もう1名はどーこでしょう？正解は……何処か

にいるでしょうねー。実は知らないのですよ。千冬先輩も教えてくれないし、私も知ろうとしないし、一夏くんは素で忘れているだろうし。世界で2人しかいないＩＳを使える男性の片方は悲しいねー。……そわそわしてます。そわそわそわそわそわしてるんです。ぐるぐるしたいのです。今、此処で立ち上がってぐるぐる回る。そんなことしたら変人に認定されちゃいます。

とかなんとか思っていると、一夏くんが追い出されて箒ちゃん、セシリアちゃん、シャルロットちゃん、ラウラちゃんと元迷子ちゃんの鈴音ちゃんが入ってきましたな。ラウラちゃんは真っ先に私の方に来ましたが。

「姉様は教官と同室でしたか」

「そだよー」

あと、一夏くんもだけど眼中に無いかな？

「さて、何が飲みたい？」

千冬先輩が缶ジュースをみんなに配る。……口封じですかなー。手にビール持ってるし。まぁ、気にせず貰います。

「アイツの何処が良いんだ？」

いきなりですねー、千冬先輩。みんな慌てて答えてますけど。しかも、正直じゃ無いからね。

「私は姉様の強さと優しさに心をひかれました」

……ラウラちゃんはアイツ＝一夏くんっていう図式は無かったのね

ー。まぁ、嬉しいからなでなでしちゃおう。
なでなでなでな

## スピードだけ紅椿く風撫

2日目になりました。……寝て起きれば日にちも変わりますね。ドキドキでしたよ……千冬先輩に襲われるんじゃないかと。一夏くんは大丈夫だと信じてますから気にしないのです。
今はみんな集まって授業的なものを展開ちゅー。専用機持ちは武装の試しをするみたいですねー。……ただ、みんなざわついてるなー。なーんか珍しいモノでも見つけたのかなー？

「ゆーちゃーん！！……と、ちーちゃん」

幻聴かなー？知りたくない知り合いの声がするなー。
とかなんとか思っていると謎の衝撃で身体が砂浜に倒れる。
原因は私のお腹にまたがっているなんちゃってアリスさん。重いけどー……退かない？

「久しぶりだね、ゆーちゃん。天才束さんだよ」

「久しぶりだな、束！！」

私が何か言う前に、束さんが千冬先輩の飛び蹴りでブッ飛ぶ。綺麗に着地した千冬先輩が私を助け起こしてくれました。

「ありがとうですよ、千冬先輩」

「気にするな。変質者を退治しただけだ」

確か、あの方は千冬先輩の親友だと認識していましたが。まぁ、束さんも千冬先輩の名前をついでに呼んだ感じでしたし。2人共、仲

良いね。

「酷いよ、ちーちゃん」

髪や衣服に砂が付着した状態で帰ってきた束さん。なーんか、因果応報って奴ですねー。髪に付いた砂を払う気も起きない……素晴らしいね。ちなみに生徒達は置いてきぼり。

「何の用だ、束？暇しに来たと言ったら遊姫の飛び蹴りだ」

何故に私が束さんに飛び蹴りする件になっているのか。

「箒ちゃんの為に専用機を持ってきたのさ」

へー、それで？……って！？えぇー！？……って驚けば良いのかな？どうでも良いけど。

今、箒ちゃんがＩＳを私物化しています。束さんが色々しているから、体育座りで見学中なんですねー。隣には千冬先輩が居て、私の頭に手を置いているんですなー。

「天才束さんが箒ちゃんの為に開発した現行のほとんどのＩＳを超えるＩＳ。その名も紅椿」

「しつもーん」

手をあげて気になる事を質問しちゃいます。

「何かな、ゆーちゃん？」

「ほとんどってどーゆーこと」

世界の偉いさんが取り込みたがるほどの束さんが製作したＩＳなのに全てじゃなくてほとんどなんて言うから気になるなる。

「いくら天才束さんでも使い手の負担を考えない超スピードのＩＳは超えられないよ。スピード以外は超えてるんだけどね」

すいませんでした。西島製鉄所に代わって謝りますねー。

## 福音の音色に不安を覚え

「2時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発第3世代肩軍用ＩＳ、銀の福音が制御下を離れて暴走」

広く薄暗い室内で私達教師陣と集められた専用機持ちの生徒達がいたのだよ。問題が起こり、現在は千冬先輩によるブリーフィングが行われているんですねー。なんでも、新型ＩＳが暴走したとか。

「衛星による追跡の結果、福音は此処から2キロメートル先の空域を通過することが分かった」

なーんか嫌な流れですねー。

「時間にして５０分後」

1時間にも満たないですが。

「学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

すごいなー、上層部。生徒に何をさすんですか？遠足先に指名手配犯がいるから捕まえろなーんて言ってるようなモノだね。

「福音のスピードに対してアプローチが可能なのは織斑、如月、それに月村先生だな」

公的な場だから月村先生ですねー、私は。はてはてさてさて、自惚れている訳じゃないんだけど、適任は私になるかな。一夏くんや如

月くんも千冬先輩が言うようにスピードに関して言えば及第点なんだよ。でもさ、不安なんだよなー。一夏くんは発展途上だし、如月くんは戦った感じだけど、駄目だね。実力は多少良いけど、前の問いかけがふざけているからねー。絶対駄目だね。

「その人選待ったー！！」

天井を破壊して、束さんが落下してくる……私の膝に。……上手く膝の上に着地してご満悦そうな顔をしてるじゃない。膝が少し痛い。

「箒ちゃんの紅椿なら福音に追い付けるよ」

凄い事を言っているかも知れないけど、私の膝上に座り私を抱き締めているからしまらない。私は無心無関心を貫きます。

名前を呼ばれた箒ちゃんはセシリアちゃん、鈴音ちゃん、シャルロットちゃんにフフンと勝ち誇った顔をする。……死地に行くかも知れないのになーにしてんの？

「月村先生には万が一に備えて待機してもらいましょう」

教師陣の1人がそんなことを言う。しかも、満場一致になってしまった。まぁ、この場に唯一居る保健の先生だからねー。……なーんか箒ちゃんが私を見てセシリアちゃん達にしたように勝ち誇った顔をするね。先生、とっても心配なんですけどー。

結局は一夏くん、箒ちゃん、如月くんの3人が福音討伐に向かい見事福音を退治したとさ、めでたしめでたし……には決してならないんだよなー、きっと。

私はのんきに先ほどブリーフィングしていた場所で体育座りをしている。別に仲間外れにされて不貞腐れている訳じゃないよ。ただただ不安なんですなー。ちなみに先生方は生徒に事情説明と監視に行ってる。

「遊姫、待たせたな」

千冬先輩が部屋に入って来て私の隣に腰をおろした。しばらく沈黙。

「一夏達は無事に戻ってこれると思うか？」

弱気ですね、千冬先輩。無事に戻ってこれるか……ですか。

「無理だと思いますよ」

はっきり言います。無駄な期待は良くない。

「何故だ？」

千冬先輩もなんとなく分かっているんじゃないかな？

「まぁ、実戦経験がありませんから。学園内での戦いは実戦とは違って環境が整っていますが実戦はそんな優しくないです。問題は別にありますが」

「篠ノ之の事か」

「そうです。私はそこまで箒ちゃんに詳しい訳ではないんですけどね。確か剣道を熱心にやっているんですよね。たまに目撃するんですけど、箒ちゃんは一夏くんに木刀を振るっていますね。剣道のみ

ならず武道に通ずる者として失格ですよ。むやみやたらに力を使うなんて。今までの反動もあるかも知れませんが、ＩＳを手にして力に溺れるかもですよ」

「オマエもそう思うか」

「はい。それに如月くんではフォロー出来ないとおもいますねー」

私がそう言うと、千冬先輩が私を引き寄せて抱き締めてきた。気のせいか微かに震えている。

「すまない、しばらく――」

「このままですね」

## 犠牲は付き物なのだよー（前書き）

ごめん……眠かったんだ。

## 犠牲は付き物なのだよー

福音の討伐任務……失敗。そんな知らせが届き、箒ちゃんと如月くん、箒ちゃんに運ばれてきたボロボロの一夏くん達が帰還してきた。私は一夏くんをすぐさま空き部屋に運び、治療を開始した。まぁ、治療と言っても保健の先生でしかない私に出来ることなーんてたかがしれてるけどねー。それでも、出来る限りの処置は施しますがね。酷いモノだよ、人の肉の焼ける臭いは。

分かっていたことなんだよね、一夏くん達じゃあ勝てない事を。箒ちゃんと如月くんの報告を聞けば、封鎖された海域に船が侵入してきたみたいだね。それを守ろうと一夏くんが福音討伐のチャンスを逃してやられたと。これは封鎖が完全じゃなかった学園側にも問題があると思うなー。

報告が終わると箒ちゃんと如月くんは部屋に戻っていった。

「やっぱり駄目でしたね」

「ああ、そのようだな」

私は体育座り、千冬先輩は部屋の壁にもたれかかっての会話。場所は一夏くんが眠っている部屋。

「たぶん、あの娘達が黙っていませんよー」

「かもしれない。だとしたら、アイツ等は自分達の立ち位置を認識していない事になるがな」

「ＩＳ学園が責められますね。やだやだ、子供の勝手で私達は路頭に迷うかもしれないですね」

「おそらく、遊姫、オマエに福音討伐を任せるだろうな、上層部は」
うわー、嫌な流れですなー。

千冬先輩が部屋を出ていき、中には私と一夏くんしか居ない状態になっちゃった。相変わらず覚醒しない一夏くんを私は眺めるだけ。
じー――――――――。
しばらく眺めていると一夏くんに変化が起きた。なーんか焼けただれた皮膚が再生していく。すっごい変な事態ですなー。
再生が完了すると一夏くんが目を開けて起きる。

「やー、お目覚め」
一応挨拶しておきますか。
「遊姫さん、オレ行かなくちゃ」
あれれ？キャッチボールが出来ていない！？
先ほどの酷い怪我が嘘のように立ち上がる一夏くんを私は止める。
行かせてなるものかー。
「何しにいくのさ」
「箒達を助けにいくんだ」

なーにがあったか知らないけども、どーやら一夏くんは状況を知ったみたい。……てか、福音に向かっていったのか、あの娘達。

「まぁ、ちょっと待ちなさい。聞きたい事があるから」

「急がないといけないんだよ」

「すぐ済むから。……一夏くん、君は封鎖を突破した船を助けにいったのかなー？」

「手を伸ばせば助けられたから」

手を伸ばせば助けられたから？なーに言ってるの。

「弱いのに？」

「強い弱いは関係ないだろ」

「確かに。……でもさ、助ける余裕なんて無かったでしょ？片手間に勝てる相手じゃ無かったでしょ？３人も居れば余裕だと思ったの？だとしたら自分を知らな過ぎるなー」

私は一夏くんの頬を軽く叩いた。

「自覚しなよー。君はまるで物語の主人公みたいな状況だけどさ、なんでも上手くはいかないんだよ。前も言ったと思うけどさ。別に弱いのが悪いなーんて言ってないけど、限界を知りなよ。想いが強ければ実力が無くても良いのか？だとしたらマンガやアニメの見すぎ。まぁ、もう話は終わりだから行っていいよ。つまらない話だったでしょ」

一夏くんの背中を叩いて行って良いよと合図を送る。

「遊姫さんは」

部屋から出ていく前に一夏くんは止まって振り返る。

「オレと同じ状況だったらどうするんですか？」

どうするもなにもねー。

「助けられる状況でも見捨てるよ。助けた事で福音に逃げられ都市かなんかに攻撃されたら嫌ですから」

**初期設定、蹴りが強いと言う奴です。**

一夏くんが出ていってしばらく、一夏くんを筆頭に専用機持ち達が帰ってきた。一夏くん、箒ちゃん、セシリアちゃん、鈴音ちゃん、如月くん……と知らない人。気のせいか見たことあるような無いような。まぁ、気のせいだね。

「お帰り、馬鹿共」

ニッコリ笑って出迎える。まったく、ラウラちゃんだけだぜー。君達が勝手に出撃してもラウラちゃんだけがこの場所に待機していたんだからなー。でも、福音の居場所をみんなに教えていたみたいだから叱りました。だから今、私の腰辺りに引っ付いている。……歩きにくいなー。

「ラウラちゃん……もう怒ってないから」

ラウラちゃんの頭に手をやりながら言います。

「本当に本当ですか？本当に姉様は怒っていませんか？」

上目遣いで恐る恐る聞いてくるラウラちゃん。……このやり取り何回目になるかなー？もう、本当に怒ってないんだけどなー。

「ちなみに君達の愚考と愚行については怒っていますよー」

一夏くん達の方を向く。なーんか私の言い方が軽いからホッとしているね。事の重大さを理解してないみたいだから、地獄に引き摺り込んであげましょうかね。

「大広間に行きなさいな。織斑先生が君達の馬鹿行為に対して説教があるから、流血覚悟をしときなさい」

「りゅ、流血覚悟って」

「ボク達……死ぬのかな？」

「ちょっと、どういうことよ！？」

流血覚悟は嘘だよ、一夏くん、シャルロットちゃん。どういうことかは知らないけどね、鈴音ちゃん。

まぁ、言いたい事がありそうだけど……とりあえず、行こうか？

一夏くん達の後ろから私と腰にしがみついているラウラちゃんが付いて行くのだよ。私は何かの引率気分ですが、彼等にしてみれば断頭台に向かう気分だろうね。自業自得で助ける気も起きないなー。

「作戦完了と言いたいが、おまえ達が我々の判断を無視して独自行動を起こす違反を犯した。反省文の提出と懲罰用のトレーニングでもさせるのだが……福音の無力化の功績で遺憾ながら今行っている説教と体罰のみとする」

大広間で正座で説教を受けている一握りのエリート達で専用機持ちのメンバー。ちなみに嫌味を言いました。彼等の前に千冬先輩、後ろに私とラウラちゃん。ラウラちゃんは私から離れているね。千冬先輩の雰囲気がとんでもないねー。気にならないけどさ。千冬先輩の近くにいる説教メンバーと何故か被害を受けている真耶ちゃん。

可哀想に、なんでそこに居るの、真耶ちゃん。

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろそのへんで……ヒィ！？」

止めに入った真耶ちゃんは千冬先輩の向けた視線に黙ってしまったよ。頑張れ、真耶ちゃん。君だけが彼等の味方だよ。ちなみに私は敵です。

「見な、ラウラちゃん。あれ……専用機持ちなんだよ。凄いと思わない？」

「凄いと思います。自ら置かれた立場を理解せずに愚かしくも独自行動を犯したのですから。今回は結果があったから良かったものを。軍ならもはや不要と見なされます……姉様」

私とラウラちゃんで千冬先輩の援護射撃。本来はもっと酷い罰を受けるんだから、軽い方だよ。

「では体罰の方だが……私の全力でのげんこつと月村先生の何かしら。さぁ、選べ！！」

なーんか私が巻き込まれているんですけど？何かしらってなにかなー？

一夏くんと箒ちゃんが震えているけど、どしたのかなー？

「オレはちふ……織斑先生で」

「わ、私も」

「わたくしは……月村先生で」

「ボクも月村先生」

「私もそれで」

「オレも月村先生が」

一夏くんと箒ちゃん以外は私ですかー。

「月村先生、此方へ」

千冬先輩が手招きしてくるから行きますか。ラウラちゃんの頭を撫でてから向かう。して、何ぞや？

「これを」

千冬先輩が何処からか取り出した、木刀を私に渡す。どーしろと？私が決めて良いのかな？切っ先で軽く小突くか？目の前で振り回す？……おぉ！！良いことがありますなー。

手を離して木刀を落とす。地面に落ちる前に右足の爪先で打ち上げ、そのまま踵落としの要領で真っ二つにへし折る。

「これで行こうかな？」

ニコニコ笑顔でセシリアちゃん、シャルロットちゃん、鈴音ちゃん、如月くんを順に見る。

「「「「織斑先生でお願いします」」」」

でしょうねー。

## ナターシャVSラウラ　そして漁夫の利（前書き）

ナターシャの性格なんてしらないなー。まだ一巻しか読んでないし。

## ナターシャVSラウラ　そして漁夫の利

色々あって臨海学校3日目の今日は朝食を食べて撤収作業をするだけなので気楽ですね。私は見ているだけですし。元々臨海学校には行かないはずでしたから。「手伝います」なーんて言えば、周りから応援だけで結構ですだってさ。だから暇なのよ。

そういえば、束さんは何処に。人参か何かを追いかけて行ったかな。ある意味指名手配犯だから、一ヵ所に長居できないのかねー。

のんきにしていると、千冬先輩が近づいてきた。

「ハロー、千冬先輩」

「今は織斑先生と呼べ。束からの伝言だ。『今の世界は楽しい？』だそうだ」

どーやら、千冬先輩は束さんと密会していたようだね。しかも、流行っているのか変な質問をしてきたみたいだね。

「今の世界は楽しい……か？どーでしょうね。そんなスケールの大きい事を考えたこと無いから」

千冬先輩が答えを聞きたいのか、待っている。……仕事しないの？

「とりあえず、楽しくもあるし、楽しくないもありますなー。ハッキリと楽しいかそうでないかは決められませんね」

「そうか」

そうです。まぁ、難しい問題ですから茶を濁します。

そうこうしている内に撤収作業が終わり、みんなバスに乗り始めている。私も行きますかね。とは言うけど先生方は最後に乗るから今は乗れません。つまりはやることが無いってことさ。ラウラちゃんが私の隣に座りたいと言っていたが、無理だよ。
ふと、何者かが近づいてくるのを感じる。感じる……って言うか普通に見える。確か、福音の人だよね。

「久し振り、遊姫」

……知らない外人さんに名前を呼ばれました。

「どちら様？」

ストレートに問いかけてみる。なーんかショックを受けた顔をしてるね。

「ごめん、思い出した。ナターシャだよね」

ギリ思い出しました。たぶんセーフだよねー。

「そう！！そのナターシャ！！」

パッと明るい顔になるナターシャちゃん。どーでもいいけど……どのナターシャ？

「遊姫が居たなら助けてよ。知らない子供達に助けられたじゃん」

いやいや、知らないよそんなこと。

「遊姫ならパパっと助けてくれたでしょ。あの……打鉄で」

その変な間はＩＳの名前が出なかったんだね。打鉄改打ち直し鎧刀・風撫だよ。第２世代だけど、いまだに現役です。

「出来たけど、命令されなかったから無理だよ」

悲しきかな。この身体はＩＳ学園の支配下にあるから命令無しではどーしようもないのさ。

「納得がいかない！！」

ナターシャちゃん、諦めなよ。もう終了したことだしね。とりあえず無事でなによりじゃないかな。

「私もバスに乗って帰らなきゃいけないから、また今度ね」

バイバイと手を振ってバスに向かう。

「させる訳にはいかない」

後ろからガバッと抱きつかれて身動きがとれない！？。

「にーがーさーなーい！！」

ナターシャちゃんが原因だよねー。バスに乗り遅れる！！本気で止めてくださいよー。

「ハワイ行く？ハワイ行く？一緒に行く？」

拉致決定！？拉致決定ですか！？誰か助けてほしいんだけど！！

「姉様を解放しろ！！」

その声はラウラちゃん。助けに来てくれたの！！

バスの窓を全開にして外に飛び出してくる。そして前から抱きついてくる。……助けてほしいんだけど……駄目？

「姉様にはドイツこそふさわしい。アメリカはアメリカらしくそこらのマッチョで満たされろ」

どこで覚えたの、その言葉を。お姉ちゃんは悲しいよー。

「ドイツは黙って、武器にでもラヴコール送ってなさい」

どーして私を挟んで罵り合いをするんですかねー。

私に抱きついたままナターシャちゃんとラウラちゃんは喧嘩中。気のせいかな、バスの中に居る一夏くんから羨ましそうな視線が。

パァン！！パァン！！

乾いた音と共にナターシャちゃんとラウラちゃんが倒れる。解放された私はまた拘束される。

「帰るぞ……馬鹿共を放ってな」

この戦いの勝者は千冬先輩でした。

**夢……か（前書き）**

苦し紛れの投稿。……嘘です。一応■■みたいにしたけど、たぶんバレてるね。

**夢……か**

風切り音が広い道場に響き渡る。
私の前に立ちはだかる■■さん。木刀を構えて、私の蹴りの猛攻を受け流している。涼しい顔で軽く受け流している■■さんに私はムキになって更なる蹴りを繰り出す。いい加減に食らってー。

「なんちゃってライダーキック！！」

勢いに任せて渾身の蹴りを放つ。なーんの勢いかは分からないけど。まぁ、そのおかげかどうかは知らないけれど■■さんの構えた木刀を真ん中らへんからへし折れた。

「んー、だいぶ強くなったね」

■■さんが嬉しそうに言ってくれた。
確かに強くなったね、私は。此処に来た当初は木刀どころか腕の骨すら折れなかったんだよー。……どっちが硬いのかね？

「遊姫ちゃん、そろそろ朝食だから終わりにしようか？」

■■さんが軽く伸びをしながら提案してくる。大賛成ですよ、■■さん。私はお腹が空きました。
■■さんの白い髪を眺める。うーん、アルビノ？でも瞳は赤色じゃないなー。肌も真っ白じゃ無いし。一見すれば女の子だね、今日は。昨日は見惚れてしまうほどの男の子でしたけど。
■■さんって神様なんだってさ。まぁ、便宜上なんだけど。見た目は完全に人だし、別に世界をどうのこうのする力なんて無い。基本的に優しい。頭撫でてくれるし、女の子バージョンの時は一緒に寝

てくれる。……ノロケじゃないよー。

■■さんと道場の外に出ようとすると、■■ちゃんに出くわす。相変わらず青いね。ブルブルブルーですね……どしたの。

「遊姫はどうしたいの？」

静かに問いかけられる。……どうしたいの？えーっと、答えたくないな。前に■■ちゃんに問いかけられた人は嬉々として答えた後に消えていった。確か、「リリなのの世界に行きたい」とか何とか。

「私は……」

……朝？

……夢？

とりあえず、起きましょうか。うーん、良い朝だねー。

ベッドから降りて、ぱぱっと着替えて身だしなみを整える。

「よし、おはよう私」

時計を見たら午前5時。今日も1日頑張りますか。……主に1年1組関係を。

## 無抵抗の人捕まえて最強言うな！！（前書き）

いきなりです。

## 無抵抗の人捕まえて最強言うな！！

臨海学校が無事には終わらなかったけどとりあえず終わり、私はのんきに保健室でぐるぐるしています。

ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる。

そういえば、千冬先輩と真耶ちゃんが教師陣にもの凄い怒られていたねー。理由は簡単、私を拉致したから。正確に言うと保健の先生を無断で臨海学校に連れ出したから……だと思いたい。なーんか、私が居ない間は大変だったみたいですよ。怪我した学生達が治療を受けられない状態に。他の先生方が頑張ったみたいだけどね。なーにかが違うようなのよ、生徒達が言うには。曰く、和みが無いと。私が臨海学校から帰って次の日に、保健室は何故か込み合った。みうっちを筆頭に擦り傷や仮病の診断。もちろん、仮病はお断りしましたよー。

さて、実はもうすぐ夏休みと言う奴が迫ってきてるのですよー。皆ガヤガヤガヤガヤ妙にテンションが高いよ。まぁ、夏休みが近いから当然かな？

……平和だね。私は平和が大好きです。

ぐるぐるーっとしてると保健室の扉が開き、何者かが入ってきた。

まぁ、何者が入ってきても良いけどね。仮病は……消えてもらうけど。

入ってきた何者かはとても見覚えがある。だけど不思議なのさ。確か、フランスで会社を経営してるって風の噂で聞いた事があるからね。

「学園以来だね、エミリアさん」

入室者はエミリア・カランティーナさん。なーしてＩＳ学園に？君も私も学生時代はしゅーりょーしたんだよ。あんまり用事無くない？

「久しぶりだな、遊姫」

何年か会ってないせいか、何か雰囲気が違う。

「どしたのかな、エミリアさん？」

素朴な疑問を１つ。学生時代の戦いで噛ませ犬と呼ばれるようになったから、私を避け続けてたのに。

「どうした？ふっ、用件は簡単だよ。……君に会いたかったからだよ」

……私に会いにきた？

「色々用事があって、しばらく君に会う機会が無かったからね。最近、用事が全て片付いたから会いにきたのさ」

「そかそか、お疲れ様」

「大変だったよ。……君に勝つ為に様々な国の学者を集めるのは」

……私に勝つ？なーんか嫌な予感が。

目の前にいるエミリアさんが笑っている。清々しいほどの笑顔。

瞬間、エミリアさんの右腕が部分展開され、私の首を掴み吊し上げる。

「莫大な財産をつぎ込み、学者供を秘密裏に集めて最強のＩＳを造らせた。イギリスの第３世代ＩＳの技術も使った最強のＩＳ。ただ、君のＩＳの技術だけは得られなかったよ。西島製鉄所は私の協力を断った。まあ良い。もはや、私のＩＳは君のＩＳよりも速いのだから」

私を吊し上げたまま、エミリアさんは嬉しそうに語った。……が、突如怒りの形相を浮かべた。

「君に負けて、あんな愚図共に負けて……私は代表候補の座から降ろされた！！私に従う従順なクラスメイト達は軽蔑の眼差しを向けてくる！！他国の専用機持ちは私を馬鹿にして！！全て……全て全て全て全て全て全て、月村遊姫……キサマが原因だ！！」

エミリアさんが腕を振るい、私を保健室の出入口へと投げ飛ばす。あまりに強く投げられ、扉を突き破って廊下に叩きつけられた。

「い……！！」

身体中、主に背中が痛い。激痛が走ると言う奴だね。
だけど痛む身体に鞭打って立ち上がり、エミリアさんを確認せず、ダッシュで逃げる。

**襲撃者が金ってのは……（前書き）**

真面目を目指したはずなのに……どうして！？

## 襲撃者が金ってのは……

今日は何の日？ジャジャジャジャーン……エミリアさんに襲撃された日。そして、今は放課後で此処は廊下。廊下は走っちゃいけません…なーんて今は言えないなー。とにかく走る走る走るぅ。生身とＩＳなら簡単に追い付かれてやられてしまいますが、いまだに追い付かれていないよ。つまりは、エミリアさんに泳がされてるってことだね。臨海学校で泳げなかったからって、これはどーかと。……一応、緊急事態なんだよねー。

さーて、アリーナの１つにやって来ました。中には練習に明け暮れる熱血男女が何人か。何人かって言うけど、一夏くん、箒ちゃん、セシリアちゃん、鈴音ちゃん、シャルロットちゃん、ラウラちゃんの６に……訂正、如月くんをいれて７人だね。ならば挨拶せねばねー。

「やあ、一夏くん達。立ち退きを要求しますよ」

「はい？」

私の言葉は伝わらなかったらしいね。

「仕方ないなー」

瞬時に風撫を展開して振り向きざまに刀改を振るう。

ガキィン！！と表せば良い金属音が響く。

「背後から卑怯じゃないかなー、エミリアさん」

「役に立たない美学など捨てた！！」

一夏くん達がポカーンとしてるけど関係無いねー。

「全身装甲のＩＳですか」

目の前には金色に彩られた全身装甲のＩＳが両手に西洋の剣を２本構えて浮いていた。

「ゴールド・フェニックスだ！！」

……貴女の出身はフランスですよね？あと、ゴールド・フェニックスはちょっと。

「とりあえず、パージ！！」

互いに触れ合える距離なので、表面装甲『鎧』を爆発させる。

「な！？」

爆発と同時に距離を置く。爆煙がはれると金色に重大な傷を負ったエミリアさんがいた。

「キサマ、私のフェニックスに傷を！！」

あれれ？さっき美学は捨てたんじゃ。

とかなんとか思っているとエミリアさんが突撃してきた。

「速い！？」

風撫と同じ、もしくはそれ以上のスピードで接近してくる。エミリアさんが横凪ぎに振るった剣を急上昇して避けると、急降下して刀改を縦に振るう。エミリアさんがそれを防ぎ、攻撃してくる。だから私も攻撃と防御をする。互いのブレードを打ち付け合い戦う中で、疑問が１つ。なーんか、エミリアさんの剣術があの時のラウラちゃんに似てるなー。

「エミリアさん、どしたのさ、その剣術は？」

質問を食らえ！！正しい答えは期待してないけどねー。

「気づいたか。ならば教えてあげよう」

教えてくれるんだ。……それも捨てるべき美学なんじゃ。

「私のフェニックスにはＶＴシステムが積んである。まぁ、ＶＴシステムの改良型だがな。織斑千冬の戦術データを持つのは当然として、戦闘した相手の戦術を記憶して再現する機能が搭載されたのだ！！」

攻撃しながら、誇らしげに語るエミリアさん。やっぱり千冬先輩のデータですか。

「なら……容赦出来ないなぁ」

両手の刀改を振るい、さらに両足の刃身までも振るう。四肢から放たれる攻撃にエミリアさんもさばききれず一度距離を置いた。

「ならば、これはどうかな？」

エミリアさんのＩＳの腰のスカートアーマーが全て外れ、６機の遠隔操作兵器ブルーティアーズとして行動してきた。

「ゴールドティアーズだ！！」

……パクり過ぎだよ、エミリアさん。

## 理を投げ捨てて（前書き）

遅くなりました。頑張りました。内容をよく確認してません。すいません。……とりあえず、どうぞ。

## 理を投げ捨てて

金色のＩＳから分離したゴールドティアーズが攻撃を開始した。６つの砲身からレーザーが放たれる。
私はアリーナを縦横無尽に飛び回り、次々回避していく。セシリアちゃんのティアーズよりも展開スピードが速いけどね、避けられない訳じゃない。
激しいレーザー群の隙間を縫うように急接近して刀改を振る。だけど、エミリアさんの剣に防がれる。次の攻撃に続けようとすると、背中に衝撃が起こり、シールドエネルギーが削られる。すぐさまエミリアさんから離れる。ティアーズがパパラッチよろしく追いかけてくるねー。エミリアさんが風撫と同等のスピードで立ちはだかり、剣を振るう。避ければ、ティアーズの射撃が行く手を阻み、なかなか攻撃に移れないなー。

「ティアーズを使ってる間は集中してエミリアさんは攻撃できないんじゃないのかなー？」

セシリアちゃんがそうであるようにさぁ。

「イギリスの欠陥機と比べるな」

パクったのによく言うね。
私が世話しなくエミリアさん&ティアーズの攻撃から逃げていると、不意にエミリアさんが不自然に中空で停止した。

「姉様に手を出すな！！」

ＩＳを展開したラウラちゃんが停止結界でエミリアさんを捕らえた

みたいだね。

「邪魔をするなよ、小娘！！」

ティアーズがラウラちゃんに牙をむく。停止結界の維持に集中しているラウラちゃんの反応速度じゃ間に合わないね。急いでラウラちゃんの方へと飛ぶ。１機のティアーズが砲身を向けてくるから……斬らせてもらいますねー。

刀改の刃を入れた瞬間、ティアーズが大爆発を起こした。

「くぅ！？」

爆発に吹き飛ばされてラウラちゃんから離れてしまい、その間にラウラちゃんはやられてしまったんだよ。

「ゴールドティアーズは爆破機能がついているのだよ。近接戦闘に特化した君にピッタリじゃないか」

なーんか、イラつくねー。とりあえずラウラちゃんは無事みたいだから良しとしようか。もう戦闘不能みたいだけどさ。さて、プライベートチャンネルで一夏君達に介入しないでと一方的に伝えて着信拒否っと。

「さてと、仕切り直しだね遊姫」

表情が見えないけど、やれやれって感じだよね。まあ、確かに仕切り直しは賛成ですが。

「エミリア、倒すよ。もしくは死んでもらうよ」

ビシッと指差す。

「奥の手を使っちゃうよ」

「奥の手？」

そのとおりさ、エミリア。ラウラちゃんに攻撃したから、もう『さん』付けは無し。

「ワンオフアビリティーだよね。実は使えるのさ」

両手に刀改を構えて制止する。

「地球ってさ、宇宙と違って色々のし掛かってくるよね？重力とかなんとか。……それを無くすアビリティー。名を……投捨（なげすて）」

引継と後押を全力全開にして、エミリアに突撃する。エミリアは反応が遅れて、私の振るった刀改を防御出来なかった。

「先ほどとはスピードが！？」

急いで私を追いかけ始めたが、さっきとは違い、まったく追いつけていなかった。

だから、優しい私は一瞬で背後へと向き直り、疾走する。通り過ぎざまに斬りつけ、方向転換してまた斬りつける。

「くそ！！」

悪態をつくエミリアは私に翻弄されてる。カルシウム不足かな？

「必殺！！」

一応叫ぶ。意味はあまりにないけどねー。全身のスラスターを使って高速横回転。手を肩と平行に上げて、刀改をしっかり握りしめている。その回転のままエミリアを何度も斬る。そして、今度は自転しながらエミリアの周りを高速回転して攻撃する。

「自転・公転斬り！！」

エミリアのシールドエネルギーを一気に削る。

「いい加減に！！」

私を振りほどいて、エミリアは私に向かって剣を振るうが、私は後退して避ける。そして、距離を空けてから私は右足を突き出した構えで突撃する。

右足の刃身がエミリアの絶対防御を破り、腹部に突き刺さり貫通する。そしてアリーナの地面に叩きつける。

「終わりだよ。君の負け」

右足を突き刺したまま、エミリアに言う。

「私が……負けた？」

荒い呼吸をしながら、エミリアが言葉を吐き出す。

「負けたって……何で？私は最強のＩＳを手にしたのに。あは……アハハ！！」

苦しそうに笑うエミリア。ＩＳの装甲越しのくぐもった声。

「負けたけど……道連れだ！！」

突然の大声と共に、背後からゴールドティアーズが激突する。その数５つ。まさか、自爆ですか！？

私が右足を振り上げて、エミリアの上半身を引き裂くのとティアーズが爆発するのは同時だった。

## 終わって戻って（前書き）

さて、唐突に最終回です。３つ投稿しますのでよろしくお願いいたします。３つとも最終回ですので。

## 終わって戻って

目を開けると白。白ホワイトヴァイス、つまり白。なーにか柔らかいモノの上に仰向けに寝ているね。とりあえず身体を動かしたいけど、なーんか身体がダルい。たぶんダルい。

「遊姫！？」

右側から驚きの声が聞こえてくる。

「遊姫、大丈夫？」

声の人物が右側から私の顔を覗き込んでくるから、その人の顔を確認できた。

……あれ？お母さん？

顔を覗き込んでくるのは年相応の見た目をした私のお母さん。うーん、どーゆーことかな？

「あなた、学校の階段から落ちて……病院に運びこまれたのよ」

……私の記憶ではエミリアとの戦いでこうなったんじゃないかなーって思うんだけど。いつ私がＩＳ学園の階段から落ちたのさ？

「３日も意識不明な状態でお母さん心配したわよ。お父さんも心配して仕事でミスばかりしたんだから」

心配そうな顔から一転、笑顔で話すお母さん。

……お父さんは仕事辞めてサバイバルゲームばかりしてたよね？

「学校のお友達も心配していたわ。それと、学校でイジメられてたなんて聞いてないわよ、お母さん」

イジメ？別にＩＳ学園でイジメられた記憶は……イジメ！！まさか、帰ってきたのかなー、私の元の世界に。高校時代にイジメられた経験がある。

この世界にＩＳは存在しない。しかし、この言い方だと語弊があるね。正確に言うなら、この世界にＩＳと言う名前の兵器は存在しない。代わりにアニメや小説やらでその名前を聞くんだよね。

何日か過ぎて退院。自宅に帰り、自分の部屋に行くと本棚があり、ＩＳと言う名のライトノベルを見つけた。その他にも幾つかライトノベル、マンガが揃っていたけど。

次は机の上を見ましょうかな？特に何にも無いね。では、引き出しには何か無いかな？……謎のノートを発見しましたよ。中身を確認すると――

○○にイジメられた。

■■にカバンの中身を隠された。

誰も助けてくれない。

――って書かれていた。なーんか、イジメられっ子だったみたいですね、私は。ヤバイな。まったく憶えていないよ。

まぁ、それは良いや。私が階段から落ちて起きるまで3日。でも私

は何百年も経験してきたんだ。
不意に嫌な予感がよぎる。
もう二度とたどり着けないと。あの幸せな日々は無いのだと。恋い焦がれたあの人に会えないと。

「嫌だな」

気がつけば泣いてた。

未練がましいとはこの事を言うのだろうね。あの日から何年か経ち、私は社会人となった。なーんと小説家になっちゃいました。イエーイ、頑張りましたよ。主人公は白い髪の男の子。内容は私の経験と想いを沢山書きました。編集者にはフィクションなのに何かリアルだと言われます。そりゃーねー。

「今日も1日頑張りますかねー」

今日も1日、あの日の事を思い出しながら生きていきますよ。

## 終わらず続いて（前書き）

二番目です。

**終わらず続いて**

気がつけば身体中に痛みが走る！？痛い痛い痛すぎるー！！っはやり過ぎかな？
目覚めると何処かの部屋に居た。何処だと思っていると、外から轟音が聞こえてくる。
この部屋の扉が開いてごちゃ混ぜの何かしらが入室してきたねー。

「「「「「月村先生！！」」」」」

「「遊姫さん！！」」

えっと……何かな？箒ちゃん、セシリアちゃん、鈴音ちゃん、シャルロットちゃん、一夏くん、真耶ちゃん……と如月くん。

「おはようございます」

一応挨拶をしましょうかね。

今回のＩＳ学園襲撃事件は被疑者死亡で片付いたらしい。私に敗れたエミリアは私を巻き込んで自殺。私が殺した事は無いものされましたよ。負傷者は私１人だけ、めでたいね。
さて、問題はフランスという国だね。今回の事件はエミリア・カランティーナというフランス国籍の人物がフランス国内でテロ行為の準備をしてＩＳ学園を襲撃したことになっている。フランスの大企業の社長が秘密裏にＩＳコアを何処からか奪い、各国の技術者を使ってＩＳを造り悪用する。各国はあまり良い事態ではない。自国のＩＳの技術がテロ行為に使われたから。批難はフランスに集中した。

何故未然に防げなかったのか？何故テロを野放しにしたのか？さらに、シャルロット・デュノアの人権侵害に関する批難も出てきた。……なーにしてんのフランス。

「つまり、お咎め無しだ」

病院のベッドの上で私は千冬先輩から件の結果を聞いた。今は４人の来客が部屋にいるなー。千冬先輩に西島さん、一夏くん、ラウラちゃん。先ほどまで居たメンバーは迷惑だからと医者に追い出されたのよねー。

「姉さまぁ」

ラウラちゃんは私の左手を握って離さない状態。エミリアの爆発に巻き込まれた私を見て、泣いてしまったらしい。うう、迷惑かけちゃったよ。お詫びに抱き締めてあげます。

「遊姫ちゃん、すまない」

西島さんが私に頭を下げてくる。なーにがすまないかサッパリですよー。

「風撫の事なんだが……」

あ！！そういえば忘れてた。

「西島さん、風撫はそちらに返しますねー」

「え？」

どーした一夏くん。

「理由を聞いても？」

西島さんが質問してくる。千冬先輩とラウラちゃんも気になる様子だね。

「もうＩＳを使えないからですよ」

爆発で吹き飛び、空中でＩＳが消えて地面に叩きつけられたらしくて、その時に左の手足をバキってね。

「左の手足が異常をきたしまして。医者が言うには多少は回復するって。日常生活をおくれるぐらいにはなるみたいなんで、大丈夫ですよ。まぁ、ＩＳは無理みたいですよ」

ははははっと明るく笑うけど、千冬先輩を筆頭に悲しい表情をしていた。

ＩＳ学園に戻れるようになった私は、左足を引き摺るようにして保健室まで向かった。今は夏休みギリギリ前。君は回復が早いねって言われましたよ。

それはさておき、今は放課後なんで辞表でも書きますか。

「遊姫さん！！」

辞表を書き終わったタイミングで一夏くんが現れた。そして目が良いのか、机の上の辞表を見つけたみたいだね。何処かの民族か君は。

「なんで辞表なんて書いてるんだ、遊姫さん？」

私に詰め寄る一夏くん。

「此処がＩＳ学園だからだよ」

「理由になってない！！」

「残念。なっているんだよ理由に。ＩＳ学園の教師は有事に備えてＩＳを扱える者じゃなければいけないんだよ。私はその基準を満たせていないだねー。まぁ、本来辞める必要は無いんだけど、ＩＳが使えない教師よりは使える新しい教師をいれる方が良いでしょ」

私は辞表を右手に持ってヒラヒラさせる。

「オレは……」

んんん？

「オレは遊姫さんに居て欲しい！！」

ガシッと右手を掴まれ、辞表を奪われる。一夏くんは真剣な顔つきで辞表をビリビリに引き裂いてしまった。

うわー、また書かなきゃ。とかなんとか思っているといきなり抱き締められた。

……何かな！？大丈夫ですよ。私は冷静ですよ。脳が止まりかかっているけど、おそらく冷静ですよ。あ、あらら！？

「オレは昔から遊姫さんのことが好きなんだ。何度も何度もオレを助けてくれて、助言もしてくれて。だから、遊姫さんには此処に残

って欲しいんだ！！」

後半大声になってるよー。外にもれちゃいますよー。まぁでも。

「ありがとうね、一夏くん」

お礼を言います。

「一夏くんの熱意に免じて留まってあげましょうかね」

「本当か！！」

扉が開いて、千冬先輩が凄い目付きで入ってきた。やっぱり聞こえてたね。

「遊姫なら一夏と付き合うことを認めよう。……一夏のモノは私のモノだからな」

……聞こえないように言ったかも知れませんが聞こえてますよ、千冬先輩。一夏くんは聞こえてないみたいだけどね。あと、付き合うとは言ってないんだけどなー。

## 終わった叶った（前書き）

ラストですが……

## 終わった叶った

あなたはどうしたいの？

私は……昇月さん、対奈ちゃん、桜と一緒に暮らしたい。

それから私は彼等な会うことは無かったなー。ははは、願うモノは得られず。かなしーなー。別に欲張ったつもりは無いんだけどなー。ただ、一緒に居たかっただけ。だけど、結果は色んな世界を回ると言う罰。どんな世界を回ったかは忘れた。何回やり直してもたどり着けない。せめてぷっつりと途絶えれば楽だよ。ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる回ってさー。いい加減に疲れるよー。まぁ、様々な世界に触れるのは楽しい。転生者を見つけると気楽だなーって思う。でも、彼等の行動は報われないよ……きっと。

「遊姫さん、しっかりしてくれ」

「姉様！！姉様！！」

一夏くんにラウラちゃんか。まさかエミリアがあんな手を使うなんてね。

あぁ……死んじゃうかな。

……あれ？寒い？

何か冷たいものの上に倒れてるのかな？
パチリと目を開けると視界一杯に雪が降り注いでいた。

……寒いなー。

……冷たいなー。

……雪降ってるじゃん！！

ガバッと起き上がって辺りを見渡すと、目の前に武家屋敷があった。
もう、すぐさま駆け寄るが雪に足をとられて転ける。寒いんですけど、気にできない。すぐに起き上がろうと顔をあげると手が差し出されていた。

「お帰り、遊姫ちゃん」

白髪の少年、昇月が私の手を取って立たせてくれた。

「た、ただいま！！」

私は昇月さんに抱きついて泣いてしまった。

## 後書きのつもり（前書き）

最後の投稿。読まなくても良し！！でも少し読んで欲しいですね、短いのですが。

## 後書きのつもり

どうもです、ネコ削ぎです。さて、今回なんとかＩＳ　何故か好かれた月村さんを完結することが出来ました。根気強く読んでくださった皆様には感謝しています。まぁ、最後の話は賛否両論あるでしょう。一応、『終わって戻って』はバットエンドで一番雑だと思います。『終わらず続いて』はノーマルエンドで一番長い。『終わった叶った』はハッピーエンド。なのに一番短いのです。どれが良いのかは任せます。つまりまる投げです。

では最後までお付き合いしてくださった皆様に改めてお礼をさせて頂きます。

ありがとうございました。

では、また会いましょう。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7528u/

ＩＳ何故か好かれた月村さん

2011年9月2日01時07分発行